

赤田 I 遺跡発掘調査報告（2）

—射水市赤田第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019年3月

富山県射水市教育委員会

赤田 I 遺跡発掘調査報告 (2)

—射水市赤田第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019年3月

富山県射水市教育委員会



上 調査区遠景（南から）

下 調査区近景（南から）

卷首図版 2



上 弥生から古墳時代の出土遺物集合写真

下 奈良から平安時代の出土遺物集合写真

赤田 I 遺跡発掘調査報告（2）

—射水市赤田第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2019年3月

富山県射水市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、富山県射水市橋下条地内に所在する赤田Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2 発掘調査は、射水市赤田第二土地区画整理組合の委託を受け、射水市教育委員会の監理のもと、日本海航測株式会社が実施した。
3 発掘調査及び整理作業期間は以下のとおりである。
　本調査 平成30年3月31日～平成30年5月29日
　整理作業 平成30年5月30日～平成31年3月15日
4 調査担当は以下のとおりである。
　監理者 射水市教育委員会 生涯学習・スポーツ課 係長 尾野寺克実
　　主任 金三津英則
　受注者 日本海航測株式会社 調査員 片山博道
5 発掘調査及び整理作業に際し、富山大学教授鈴木景二氏に指導協力を頂いた。記して謝意を表します。
6 出土遺物及び原図・写真類は射水市教育委員会が保管している。
7 本書の執筆は金三津英則氏（射水市教育委員会）の指導のもと、片山博道（日本海航測株式会社）が行った。また、編集は片山が行った。
8 発掘調査及び整理作業の参加者は以下のとおりである。
　発掘作業員 伊藤恵美子 上坂清三 大田久美子 工藤熱 齋木和佳 酒井文夫 常本啓文
　得地登 得能薰 中田和雄 西川精一 西川敏 宝田紀代春 福田恵子
　松浦華織 真野等
　整理作業員 伊藤恵美子 大田久美子 片山陽子 齋木和佳 福田恵子 松浦華織 真野等

凡　　例

- 1 本書の方位及び座標は、世界測地系の平面直角座標第VII系を基準とし、標高は東京湾平均海面(T.P.)で表示している。
2 遺構記号は、以下のとおりである。
　SI: 橫穴建物 SB: 捨立柱建物 SA: 棚列 SP: 柱穴・ピット SE: 井戸 SK: 土坑 SD: 溝 NR: 自然流路
3 引用・参考文献は著者及び発行年(西暦)を文中に〔 〕で示し、註は文中に^{II}で示し、巻末に掲載している。
4 本書に掲載した遺物の番号はすべて通し番号とし、本文・写真図版の番号はすべて一致している。
5 本書で使用する用語は以下のとおりである。
　遺構の単位：捨立柱建物を1棟、溝・流路を1条、それ以外を1基としている。
6 遺構・遺物の網掛けなどは各図に示している。

目　　次

卷首図版・例言・凡例

第1章 調査の経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査・整理の方法と経過	2
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 調査の成果	5
第1節 調査区及びグリッドの設定	5
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	7
第4章 総括	33
第1節 遺跡の様相	33
第2節 遺物の様相	33
引用参考文献・註	36
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 調査位置図	1	第12図 挖立柱建物・柵列平面図・断面図	15
第2図 地形・地質図	3	第13図 挖立柱建物・柵列出土遺物図	16
第3図 周辺の遺跡分布図	4	第14図 SE031 平面図・断面図、出土遺物図	18
第4図 調査区及びグリッド設定図	5	第15図 SD001・SD002 平面図・断面図	20
第5図 調査区上層断面図	6	第16図 SD001・SD002 出土遺物図(1)	21
第6図 遺構配置図	8	第17図 SD002 出土遺物図(2)	22
第7図 SD003 平面図・断面図	10	第18図 SD037 平面図・断面図、出土遺物図	23
第8図 SD003 遺物出土状況図、出土遺物図	11	第19図 遺構外出土遺物図	24
第9図 SD092 平面図・断面図、出土遺物図	12	第20図 集落の様相	34
第10図 SK090 平面図・断面図、出土遺物図	12	第21図 土器の変遷	35
第11図 SI100・SK032 平面図・断面図、出土遺物図	13		

挿表目次

第1表 時代・遺構・種類別内訳表	8	第6表 遺物観察表(3)	29
第2表 遺構一覧表(1)	25	第7表 遺物観察表(4)	30
第3表 遺構一覧表(2)	26	第8表 遺物観察表(5)	31
第4表 遺物観察表(1)	27	第9表 遺物観察表(6)	32
第5表 遺物観察表(2)	28	第10表 遺構と遺物の変遷表	36

写真図版目次

卷首図版 1 上 調査区遠景（南から）
下 調査区近景（南から）

卷首図版 2 上 弥生・古墳時代の出土遺物集合写真
下 奈良・平安時代の出土遺物集合写真

写真図版 1 弥生・古墳時代の遺構

写真図版 6 出土遺物(2)

写真図版 2 奈良・平安時代の遺構(1)

写真図版 7 出土遺物(3)

写真図版 3 奈良・平安時代の遺構(2)

写真図版 8 出土遺物(4)

写真図版 4 奈良・平安時代の遺構(3)

写真図版 9 出土遺物(5)

写真図版 5 出土遺物(1)

写真図版 10 出土遺物(6)

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

射水市赤田地区（橋下条地内）では、平成14年度より約14haの範囲において土地区画整理事業（第1期）が実施され、商業施設及び分譲宅地の整備が行われた。平成28年、第1期事業区域の南側に隣接する約7haの範囲において、新たな土地区画整理事業（第2期）が計画され、平成30年度での造成工事着手を想定した諸手続きが進められた。

事業計画地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である赤田I遺跡範囲の中央部に位置している。同遺跡では、第1期事業に伴い、平成14年度に、試掘調査及び街区道路部分の本発掘調査、平成15年度から19年度にかけては、個人住宅の建築に伴う本発掘調査がそれぞれ実施され、9世紀後半の草仮名墨書き土器をはじめ、尾張猿投・京都洛北産の縁軸陶器や多数の木製品等が出土した構が検出されている。

第2期事業の実施に当たり、射水市教育委員会は、事業関係者と埋蔵文化財の保護措置に係る協議を進め、平成29年6月に、射水市教育委員会が主体となって事業計画地全域を対象とした試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、事業計画地の一部において奈良・平安時代の遺構・遺物の広がりが確認され、埋蔵文化財の保護措置が必要となった。

開発事業者である射水市赤田第二土地区画整理組合と射水市教育委員会との協議の結果、平成30年3月5日に、保護措置が必要となる埋蔵文化財の範囲、事業者の費用負担による街区道路部分を対象とした記録保存のための本発掘調査の実施及び事業者から民間業者への発掘調査業務の委託、分譲宅地部分における個人住宅建築に関する埋蔵文化財の取扱いについて、協議確認書を取り交わした。

その後、事業者により、発掘調査業務担当に日本海航測株式会社が選定され、射水市教育委員会の監理のもと、街区道路部分の611m²を対象に本発掘調査を実施することとなった。

平成30年3月26日、射水市赤田第二土地区画整理組合、射水市教育委員会、日本海航測株式会社の三者間で協定を締結し、平成30年3月31日より現地における発掘調査に着手した。



第2節 調査・整理の方法と経過

第1項 発掘調査

発掘調査は平成30年3月31日～平成30年5月29日まで行った。

- 3月31日～4月3日 準備として基準点と調査区設定の測量、バックホウ0.25m³相当（常置、排土整形、埋戻し等）と0.4m³相当（非常置、表土掘削、埋戻し）搬入。
- 4月4日～4月6日 調査区設定の段階確認を行い、射水市教育委員会の了承後、表土掘削。作業員は新規入場者教育を受けた後、作業を開始し、重機にて表土掘削したところから調査区壁面整形・側溝掘削を行った。その他、道具・資材等を搬入した。
- 4月9日～4月12日 グリッド杭設定。表土掘削・グリッド杭の段階確認を行い、射水市の了承後、遺構検出を開始。断面計測のための水準点を調査地内に設定した。
- 4月13日～5月15日 遺構検出の段階確認を行い、射水市教育委員会の了承後、遺構掘削を開始。写真撮影はデジタル一眼レフカメラを使用した。遺構断面図は原則手測りで行い、遺構平面は空中写真測量、詳細はトータルステーションを使用した。重要遺物は頭に「d」を付与し、通し番号で取り上げた。
- 5月11日 富山大学鈴木教授来跡。
- 5月16日～5月21日 遺構掘削完了の段階確認を行い、射水市の了承後、空中写真撮影及び測量を行った。空中写真撮影はラジコンヘリコプターを使用し、デジタル一眼レフカメラで撮影を行った。その後、重複遺構のベルト掘削等の補足調査を行った。
- 5月22日～5月24日 バックホウ0.4m³相当搬入。中間検査を行い、射水市教育委員会の了承後、バックホウ0.4m³相当と0.25m³相当の2台で埋戻しを行った。バックホウ0.25m³相当、0.4m³相当と調査事務所等を搬出。現場及び事務所周辺の後片付けを完了した。
- 5月28日 埋戻し完了の段階確認を行い、射水市教育委員会の了承を受けた。
- 5月29日 射水市赤田第二土地地区画整理組合と射水市教育委員会と日本海航測株式会社の3者で現地調査完了の確認を行い、射水市赤田第二区画整理組合に現地を引渡し、現地調査を終了した。

第2項 整理作業

整理作業は平成30年5月30日～平成31年3月15日まで行った。

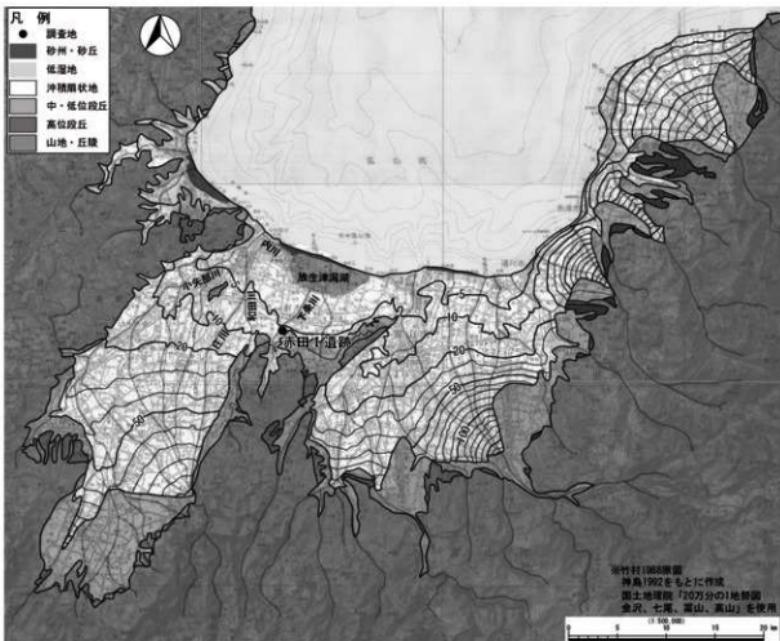
- 5月30日～9月7日 遺物の洗浄・注記・接合・復元・分類・選別。
- 5月30日～7月13日 断面図整理・断面図トレース・写真整理。
- 7月30日～12月28日 実測・拓本・遺物トレース。
- 11月1日～2月25日 報告書作成・校正。
- 2月26日～3月15日 原稿入稿・印刷・製本・発行。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

富山県の平野は第2図のとおり河川による扇状地で構成され、黒部川・片貝川・早月川扇状地、常願寺川・神通川扇状地、小矢部川・庄川扇状地、下条川・鍛冶川扇状地（射水平野）に分かれる。これらの違いは地形と水源、その距離によって扇状地の堆積過程が異なると考えられる。こういった中、本遺跡は射水平野のち下条川右岸に位置し、射水丘陵と呉羽丘陵を背後に、扇状地の西を小矢部川・庄川、東を神通川に挟まれた沖積平野である。この沖積平野の地層は新生代第四紀沖積層に砂層・粘土層・疊層が堆積し、内陸部には泥層が堆積している〔相馬 1992〕。

本遺跡は標高約5.5mで、射水平野は概ね標高5m以下の低地である。縄文時代の海進では最大標高5m付近まで海面が上昇した〔神島 1992〕とされ、この海進と海退は何度も繰り返された。この結果、丘陵近くまで広がっていた潟湖が急激に縮小することで後背湿地が残り、旧流路や湿地内に形成された池沼に泥炭が堆積し、その状況は概ね第2図に示した放生津潟の範囲内において泥炭が確認されている。以上、射水平野に分布する遺跡は、河川氾濫による自然堤防、汀線移動による砂堤列の微高地を中心に分布し、このような地形の変遷に伴って生活の場を変えていたと推察される。



第2図 地形・地質図

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺には旧石器時代から近世までの遺跡が多数分布している（第3図）。その分布は地形と環境により丘陵と平野に分かれ、丘陵には旧石器時代（98）から縄文時代、平野には弥生時代から近世といった傾向がみられる。しかし、縄文前期以前の射水平野は前節で既述したとおり、海進・海退を繰り返しているため安定した土壌ではなく、居住できる環境になかったと推察される。このことは、第3図に示したように縄文時代前期から中期の遺跡分布ラインからも分かる。

縄文時代前期の遺跡（22・76・98）は平野の針原西遺跡（22）と丘陵に分布し、針原西遺跡より北側には遺跡がみられない。縄文時代中期になると、遺跡分布は東津幡江遺跡と（31）など、現在の下条川と概ね平行した地域に分布しているが、この時期の遺跡分布は下条川より丘陵側に点在する程度である。縄文時代後期から古墳時代の遺跡分布は縄文時代中期よりさらに北西側に移動している（46・47・八塚C遺跡）。これらの遺跡より北西側では古代・中世の遺跡が多く分布している。以上から、縄文時代中期と縄文時代後期から古墳時代の遺跡は河川氾濫による自然堤防状に形成されたことを示唆している。

本遺跡は弥生から古墳時代、奈良から平安時代であり、湯の汀線より南側に位置しており、比較的安定した土壌であったと考えられるが、本調査では下層の黒色層と上層・下層の大溝跡を確認していることから、下条川の支流による氾濫原であったと推測され、過去の調査からもこのことを示唆している。古墳時代になると、射水丘陵に古墳が多数構築され、飛鳥時代から平安時代中期には須恵器窯・製鉄炉が構築される。本遺跡では奈良から平安時代の大溝跡において一定量の鉄滓・ブイゴ羽口、歪んだ須恵器片等が出土していることは鉄・須恵器生産との関連を示唆している。



第3図 周辺の遺跡分布図(1:50,000)

第3章 調査の成果

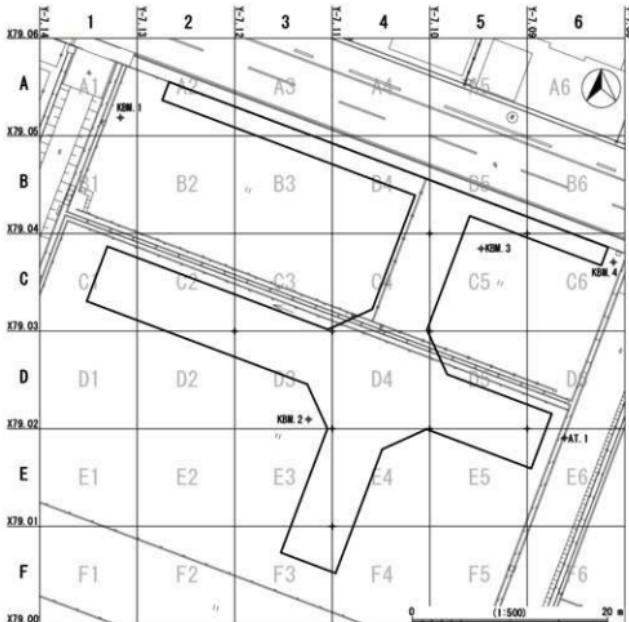
第1節 調査区及びグリッドの設定

調査区は宅地造成に伴う道路部分 611 m²である。調査区と基準点のデータは射水市赤田第二土地区画整理組合から提供を受け、このデータを基に調査区の設定を行った。基準点を基に T1 を設定し、さらに調査区内には KBM. 1 ~ 4 を設定した。これら KBM. 4 点は調査区断面・遺構断面・遺構詳細図、平面測量を行う際に使用する。

グリッドは、調査区に対して X 軸をアルファベット、Y 軸を算用数字で表示し、10m 四方を 1 区画とした。北西隅を基準として、西から東へ Y 軸 1 ~ 6、北へ南へ X 軸 A ~ F の順とし、各グリッドを A-1 ~ F-6 のように X 座標-Y 座標とした。調査区は X 座標 79.00 ~ 79.06, Y 座標 7.08 ~ 7.14 の範囲（南北 60m、東西 60m）で、調査区全体を 36 グリッドに分けた。

調査区内にはグリッド杭を打設したが、グリッド杭が調査区に入らない箇所では調査区端に端杭を打設してグリッドが見通すことができるようとした。

遺物の取り上げは原則グリッドごとに行っているが、遺構内は遺構ごと、残りが良好な遺物・重要性、特殊性を考慮してトータルステーションで 1 点 1 点に位置情報を持たせて取り上げている。

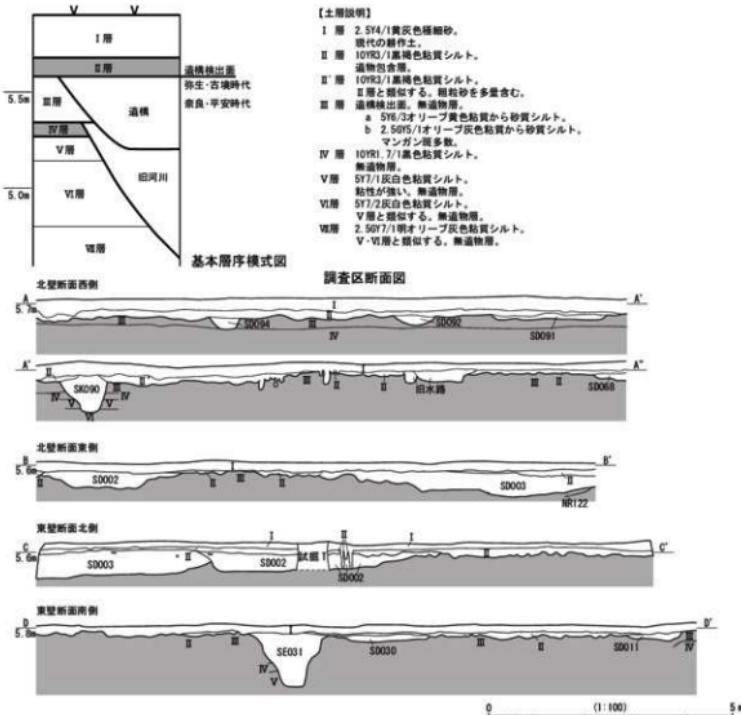


第4図 調査区及びグリッド設定図

第2節 基本層序

基本層序は第5図に示したとおりである。調査区断面のセクションポイントA～Dは第6図と対応している。

I層は現代の耕作土で、厚さは約20～40cmである。II層は遺物包含層と考えられるが、遺物は少量出土する程度で、厚さは約10～30cmである。概ね調査区全体に確認できるが、ほ場整備や耕作の影響により削平されており、部分的に残っている。調査区西側は旧水路から西側が一段下がり、20～30cmと厚く堆積している。III層は所謂地山で、本調査区では弥生から古墳時代と奈良から平安時代の検出面である。III層は均一ではなく、粘質から砂質シルトが斜めに互層状に堆積しているため、平面では場所によって土質が異なる。調査区西側と南側では粘質シルトで、北側と東側では砂質になる傾向がみられる。本調査では土質によって分けると分層が細くなるので、土色によりaとbの2種類に分けた。IV層はII層と類似するが、IV層の方がより黒味と粘性が強い。IV層中には纖維状の植物遺体が含まれており、湿地堆積の可能性を示唆している。V～VII層は粘性が強く、無遺物層である。



第5図 調査区土層断面図

第3節 遺構と遺物

第1項 概要

本調査では、遺構が溝25条、土坑4基、井戸1基、柱穴92基、堅穴状遺構1基、旧河川1条の計124基検出された（第6図）。遺物はコンテナで18箱出土した。その内訳は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、鉄滓、フイゴ羽口、金属製品、木製品である。時期は概ね弥生から古墳時代と奈良から平安時代に分かれ、その他、中世から近代の遺物がみられる。中世から近代の遺物は耕作土・包含層・搅乱等の遺構外出土で、遺構に伴うものがみられないことから、本調査では弥生から古墳時代と奈良から平安時代の遺跡と考えられる。以下では時代ごとにみていく。

弥生・古墳時代

当時代は弥生時代終末期から古墳時代前期と推定される。主な遺構はSD003・092、SK090で、その他は当期か奈良から平安時代に帰属するのか不明である。検出遺構は調査区東端と西端に位置しており、集落としての様相は不明瞭である。

出土遺物は弥生土器と土師器で、器種は高杯・壺・甕・円盤状土製品である。

奈良・平安時代

当時代は8世紀中葉から9世紀後葉と推定される。主な遺構はSD001・002、SI100、SE031で、その他の溝と柱穴は北側のグループA(B-C-4・5)、西側のグループB(C-D-1・2)、中央から南東側のグループC(C-3・4、D-E-3～5、F-3・4)の3箇所にまとまりを確認できる。これらの中から柱穴の並びと溝との関係から、掘立柱建物・柵列・溝で構成される施設(SB043、SA056、SD024・025・068・113・124)、SB048、SA006・026を確認できるが、不明瞭な部分が多い。

出土遺物は須恵器（杯A・杯B蓋・杯B身・盤・椀・鉢・横瓶・壺蓋・甕）、土師器（椀・皿・壺・甕）、灰釉陶器（椀・皿）、石製品（砥石）、鍛冶関連遺物（フイゴ羽口・鉄滓・炉壁）、木製品（舟串・皿・曲物・付木・容器・炭化材・加工材）である。

中世・近世

当時代は確実な遺構を検出しておらず、遺物は概ね遺構外出土遺物である。出土遺物は珠洲（播鉢・甕）、陶器（碗・皿・鉢・甕）、青磁（碗）、磁器（碗・皿）、銭貨である。

出土遺物について

第1表は本遺跡出土遺物の時代・遺構・種類別内訳表である。種類別割合は古代土師器が3割超と最も多数出土し、統いて弥生土器及び古墳土師器が3割弱、須恵器が2割超と続く。概ねこの3種類が8割超を占め、鍛冶関連遺物が1割超で、その他は1割未満である。

弥生から古墳時代の遺物は、遺構が3基のみであるのに対して比較的多数出土している。古代では、古代土師器と須恵器の割合は6:4と古代土師器の方が多く、詳細な検討を要するが、遺跡全体として土師器優位な時期であることから、遺跡の主な時期が9世紀中葉以降を示唆している。

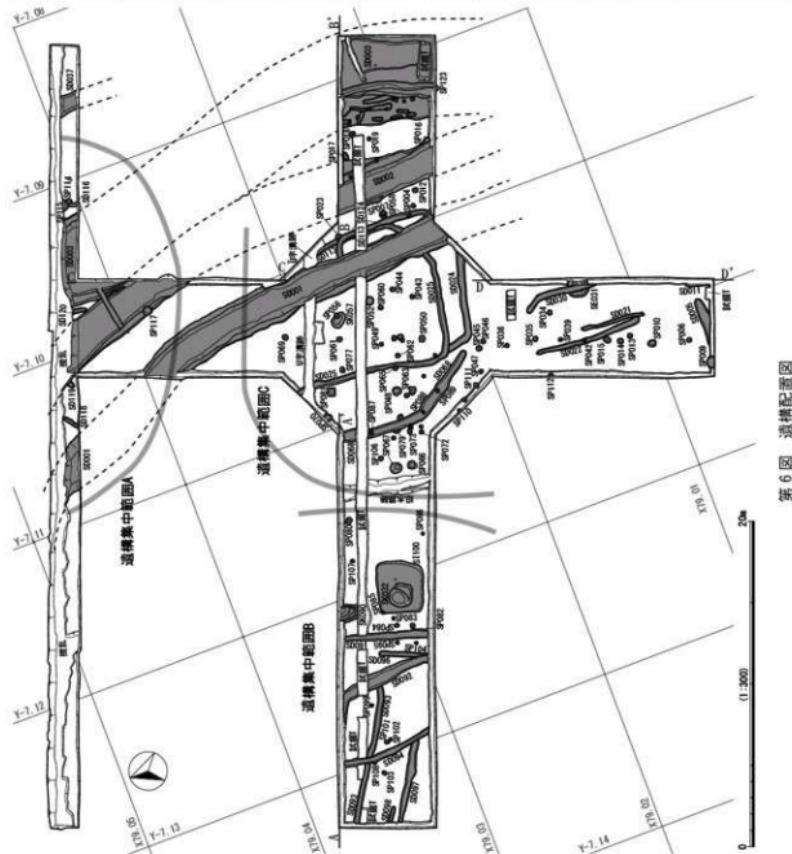
また、今回の調査では鍛冶炉を検出していないが、鍛冶関連遺物が比較的多数出土していることについて注目される。このことは本遺跡と同時期に背後の丘陵一帯において須恵器窯跡・製鉄炉跡が構築され、須恵器や鉄生産が行われていたこととの関連性が窺われる。

木製品は概ね9割が井戸の出土で、その他、溝から少數出土し、柱穴からは柱材の一部である。

以上、今回の調査では範囲が限られているので、本遺跡の様相の一部をみているにすぎないことから、第4章において過去の調査も踏まえて検討したい。以下では主な遺構と遺物について説明する。

第1表 時代・遺構・種類別内訳表

時期	遺構	弥生土器 古墳 土器	須恵器	古代土師器	灰陶器	珠・鏡	近世陶器	近世磁器	青磁	鐵冶関連	木製品	石製品	金属製品	合計	割合
弥生～古墳期	溝	845	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	845	24%
	土坑	96	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	96	3%
	小計	941	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	941	27%
平安～平安期	溝	—	355	567	—	—	—	—	—	332	16	3	—	1273	37%
	土坑	—	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	0%
	柱穴	—	22	53	—	—	—	—	—	—	2	1	—	78	2%
	井戸	—	10	20	—	—	—	—	—	—	134	1	—	165	5%
	整穴	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	0%
小計	0	390	645	0	0	0	0	0	332	152	5	0	1524	44%	
	遺構外	430	464	1	9	12	9	1	63	3	2	2	994	29%	
合計		941	820	1109	1	9	12	9	1	395	152	8	2	3459	100%
割合		27%	24%	32%	0%	0%	0%	0%	11%	4%	0%	0%	0%	100%	



第6図 遺構配置図

第2項 弥生・古墳時代

(1) 溝

SD003(第7-8図、写真図版1-5-6-10)

B-5とD-E-5-6グリッドの2箇所に分かれて検出された。B-5グリッドでは調査区北辺の道路側溝による擾乱を受け、SD002に切られる。D-E-5-6グリッドでは東端が調査区外にあり、西岸の浅い部分にSP026～029・033・038・040・041・123の9基のSA026に切られる。検出面はⅢ層上面である。平面形は不明であるが、北と南で検出した位置関係から調査区外のC-D-5-6グリッドにおいて蛇行すると推測される。西側の浅い部分には溝と平行する小溝を5条、直行する小溝1条確認している。

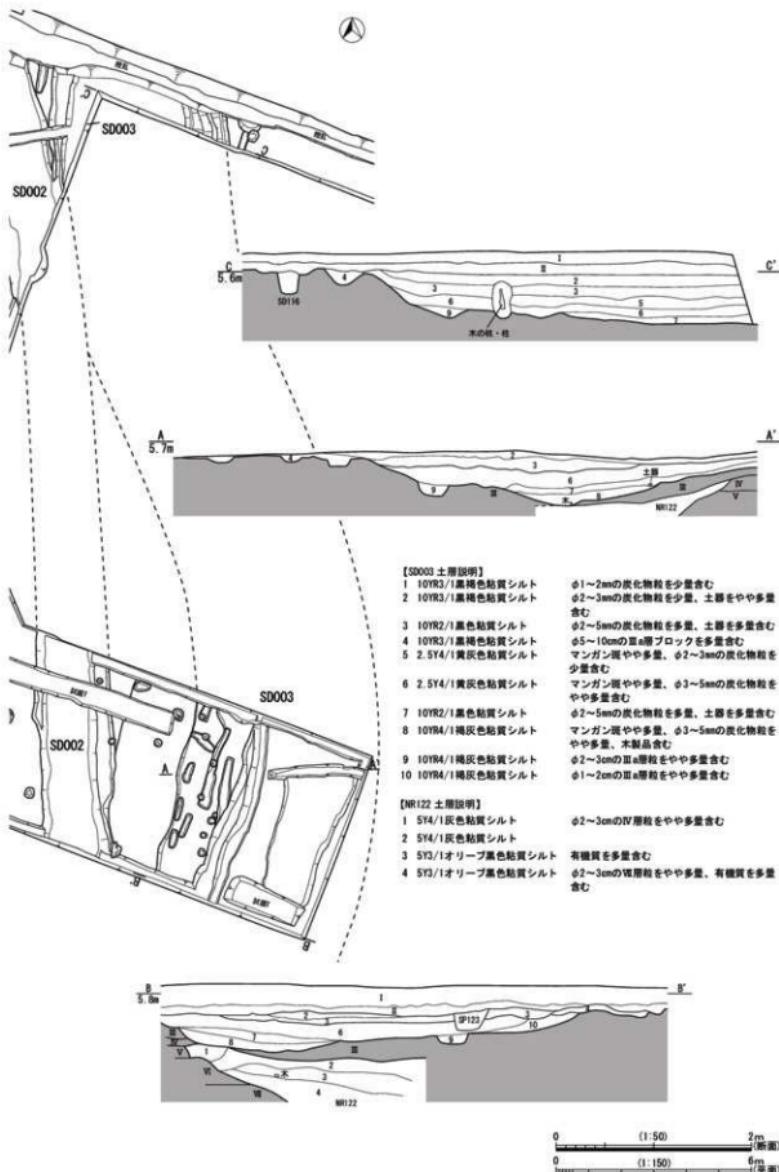
埋土は①2・3層、②5・6層、③7・8層、④9・10層の4つに分かれる。①と③には炭化物が多量に含まれ、①には古墳土師器、③には弥生土器と木製品が出土している。弥生土器・古墳土師器片はいずれも2次焼成を受けたように土器表面が貫入状を呈する。

第8図ではSD003-1(上層)とSD003-2(下層)の平面図を掲載している。SD003-1は南側がやや高く北側のサブトレーン付近で深くなり、凹凸が目立つ。南側の高い部分に甕片がまとまって出土した地点(第8図)がみられるが、残存状況は悪く、接合・復元はできなかった。SD003-2は北側のサブトレーンから南側がやや深くなっている、一段高い部分に甕(1～4)がまとまって出土している。4は甕の口縁部の一部が欠損しているのみで概ね完形である。出土状況は当時の状況が復元できるもので、埋没過程の中で土圧により破損したものと推測される。1～3は口縁部と胴部片がまとまって出土し、口縁部の器形から少なくとも3個体分の破片であることが分かった。SD003-1と同様に底面西端に1条の小溝がみられる。

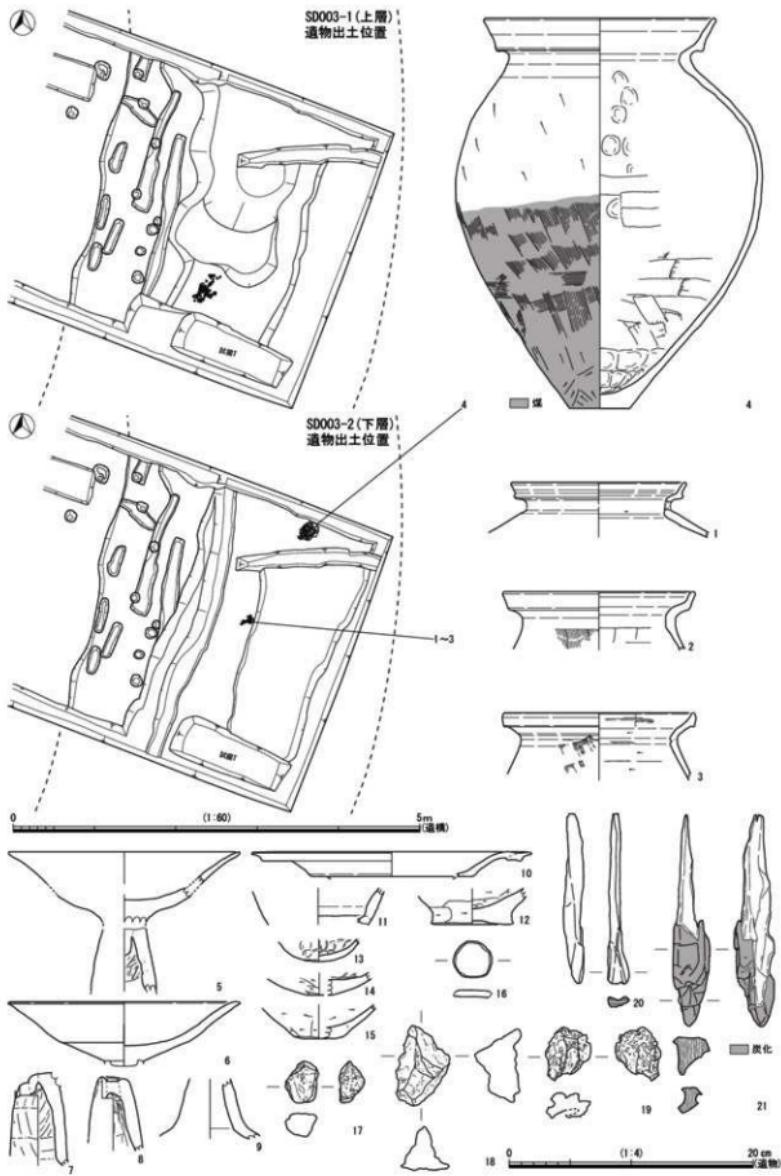
また、第7図の断面図A-A'にも掲載しているが、SD003の下層に自然流路NR122を確認した。深さとその広がりは確認できていないが、調査時の状況からSD001付近が西岸になると推測される。

遺物は、弥生土器(1～4・10・15)、古墳土師器(5～9・11～14)、土製品(16)、鉄滓(17～19)、木製品(20・21)を図示した。1～3は甕の口縁部で、頸部が短く立ち上がり、くの字状に屈曲する。口縁端部では上方に短く立ち上がり、それぞれ異なった形態を呈する。胴部は、1が肩を張るタイプ、2がなで肩タイプに分かれる。調整はいずれも同様で、口縁部は横ナデ、胴部外面は縱方向のハケメ、内面は横方向の板ナデを施す。4は頸部は3と同様で、口縁部の上方へ長く立ち上がり、縁帯を形成する。胴部は胴部中央よりやや上方で最大となり、なで肩、底部径は小さくなる。全体的に摩耗しているが、胴部外面は縦及び斜め方向のハケメ、胴部下端は板ナデ、内面は指押え後に板ナデを施し、底部は指圧痕が残る。口縁部から頸部は横ナデを施す。5～9は高杯で、全体を復元できるものはない。5・6は杯部と脚部を確認できる。杯部は外面に稜を有し、口縁部は外反する。脚部との接合は、杯部を凸、脚部を凹として接合している。7では脚部の調整を確認でき、縦方向の板ナデ、接合部は指圧痕がみられる。9は脚部下半で、下半では外に屈曲する。10は壺の口縁部である。二重口縁で、端部はさらに関外反する。11は壺胴部である。12・13は壺底部で、13は小型丸底壺である。14・15は甕底部で、14は丸底、15は底部径の小さい平底である。16は円板状土製品である。17・19は発泡が多い鉄滓、18は炉壁の一部である。20は用途不明の棒状木製品である。21は杭状木製品で、側面と先端をケズっており、被熱により炭化している。時期は1～4・10・15・20・21が弥生時代終末期、5～9・11～14が古墳時代前期、17～19は奈良から平安時代の混入である。

以上、出土遺物と埋土から、①と③の2時期を確認でき、①が古墳時代前期、②が弥生時代終末期の溝である。②は間層で無遺物層である。



第7図 SD003 平面図・断面図



第8図 SD003 遺物出土状況図、出土遺物図

SD092(第9図、写真図版1・7)

C-D-2グリッドに位置する。北側と南側は調査区外に延び、北側は調査区壁面で西へ屈曲する。検出面はⅢ層上面である。平面形はL字状で、断面形は皿状を呈する。規模は長さ7.30m、幅0.45m～0.92m、深さ0.20mである。切り合い関係はSD093・SD096を切る。埋土は黒色粘質シルトで、埋土中に土器片が多量含まれている。

遺物は高杯(22)・甕(23・24)の3点を図示した。22は高杯の杯部と脚部の境である。23・24は甕の底部である。時期は出土遺物から古墳時代前期と推定される。

(2) 土坑

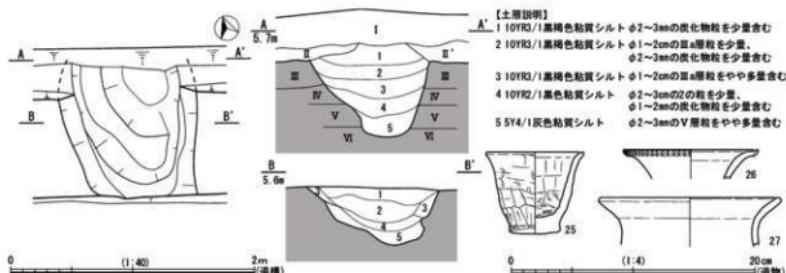
SK090(第10図、写真図版1・5・7)

C-2グリッドに位置する。南側は試掘トレーニチに切られ、北側は調査区外にあり、検出範囲は概ね3分の1程度と推測される。検出面はⅢ層上面である。ここでは土坑と判断したが、溝の先端の可能性も指摘しておく。平面形は楕円形で、断面形は有段の逆三角形を呈する。2段のテラスを有し、平面では三日月状を呈する。検出範囲内では東西1.05cm、深さ0.77cmである。埋土は5層に分かれ、黒褐色粘質シルトが主体で、1・2・4層は炭化物粒を少量含んでおり、SD003と類似する。

遺物はコップ形ミニチュア土器(25)・壺(26)・甕(27)の3点を図示した。25は内外面ともに指押えで成形後板ナデ調整を行う。26は口縁端部に連続刺突文を施す壺である。27は頭部が外湾する甕である。時期は、25・27が古墳時代前期、26が弥生時代中期であることから、古墳時代前期と推定される。



第9図 SD092 平面図・断面図、出土遺物図



第10図 SK090 平面図・断面図、出土遺物図

第3項 奈良・平安時代

(1) 竪穴状遺構

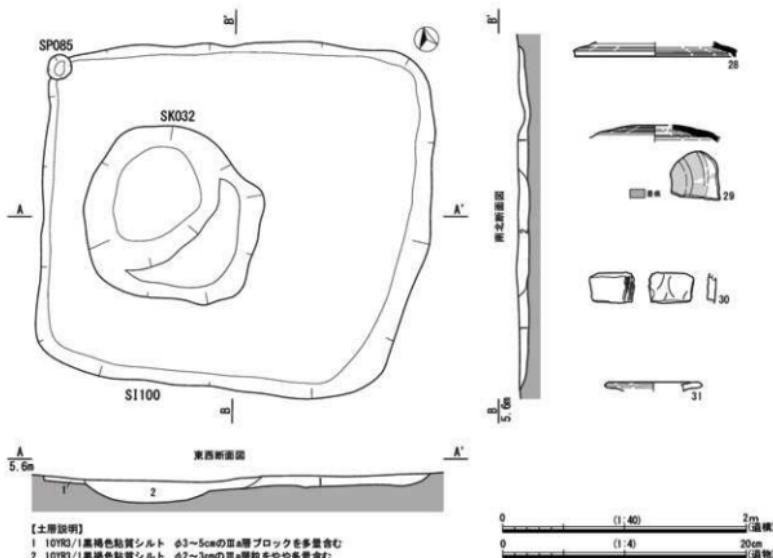
SI100・SK032(第11図、写真図版3・7)

C・D-2・3グリッドに位置し、SP085に切られる。この周辺は耕作痕が深くまで影響し、平面で検出困難であったことから剣先スコップで薄く鋤取りながら検出を行った。そのため、検出面はⅢ層上面であるが、当時のⅢ層上面から10~15cm程度下がっている。SI100の平面形は隅丸方形を呈しており、床面等の内部施設を確認できないので、不明遺構としたが、竪穴建物の可能性が高く、竪穴建物と想定すると、SK032は建物内の土坑と考えられる。

SI100の規模は、南北3.18m、東西2.80m、深さ0.10mである。断面は皿状を呈する。埋土は1層で、黒褐色粘質シルトにⅢ層ブロックが多量に含まれ、掘方埋土の可能性が高い。

SK032はSI100の中央よりやや西側に位置する。平面形は楕円形、断面形は椀状を呈する。規模は、南北1.40m、東西1.60m、深さ0.22mである。埋土は1層で、黒褐色粘質シルトにⅢ層粒をやや多く含んでいる。

遺物は須恵器(28・29)・古代土師器(30・31)を図示した。28は杯B蓋である。口縁部の屈曲が強く稜を有する。29は天井部のみで、外面にはヘラ切り後未調整である。内面には墨の痕跡がみられ転用硯である。30は甌の胴部片で、外面にタタキ、内面に当具痕がみられる。31はミニチュア土器の口縁部のみで、全体の器形は不明である。時期は28が8世紀後葉、29が9世紀前葉から中葉、30が9世紀中葉から後葉、31は不明である。



第11図 SI100・SK032 平面図・断面図・出土遺物図

(2) 挖立柱建物・柵列（第12・13図、写真図版2・5・7・9・10）

柱穴は第3節第1項で既述したとおり、北側の遺構集中範囲A(B・C-4・5)、西側の遺構集中範囲B(C・D-1・2)、中央から南東側の遺構集中範囲C(C-3・4、D・E-3～5、F-3・4)の3箇所にまとまりを確認できるが、柱穴の並びについては不明瞭である。ここではその中で遺構集中範囲Cにおいて掘立柱建物・柱穴列について説明する。また、柱穴についてはSP009・065のように特別なものに関しては取り上げているが、それ以外の柱穴については遺構一覧表と第6図のみの掲載とした。第12図は掘立柱建物・柵列と考えられるものを示した。各遺構番号は最小の数字を代表して付けた。

SB048・SA006 SB048はSP048・063・066・067・081・072・073・079・087で構成される。梁行・桁行約5mの概ね正方形を呈するが、北へ延びることも考えられる。南の柱間は梁行約1mと狭く、桁行約2.5mで、SP072は棟持柱と推測される。中央よりやや南側にSP087が位置する。四方の柱穴は比較的大形で径約50～80cm、中央の柱は約20～30cmである。

遺物は須恵器(32・33)・古代土師器(35)・鍛冶関連遺物(34)を図示した。32は杯B蓋である。口縁部は垂下し、端部の断面形は三角形を呈する。天井部はヘラ切り後未調整である。33は杯Aである。体部の傾きはやや大きく、底部はヘラ切り後未調整である。34は小型の鉄滓である。35は甕の口縁部で、端部は方形である。外面に煤が付着する。時期は32が9世紀前葉、33が9世紀前葉から中葉、35は古墳前期と推定され、35は混入と考えられる。以上から9世紀前葉から中葉と推定される。

SA006はSP006・010・013・014・015・042・039・035・036・046・045・047で構成され、北側で西方向へ屈曲するL字状を呈する。SP006からSP046の長さは約12.7m、柱間は1.5～2.5mである。

遺物は須恵器(36)を図示した。36は体部の傾きが大きく、器高はやや低い。底部はヘラ切り後未調整である。時期は9世紀前葉から中葉と推定される。

SB043・SA056 SB043はSP043・060・044・049・050・062で構成され、多角形を呈する。東西約4m、南北2.0～2.5である。SB043の建つ場所は検出高5.6mで、周囲のSD024・025が5.5mと微高地である。建物周囲にはSD024・025・068が2重の溝として区画する。北側の境は確認できないが、SA056で区切られている。また、SD001を挟んだ所にSD113とSD124がみられるが、SD024・025とのつながりは不明である。SD124はSA056へ向かって西へ屈曲するが、SD001より西側では検出されなかった。

遺物は須恵器(37～39・44～47)・古代土師器(40)を図示した。37・39・45は甕の胴部片で、外面に平行タタキ、内面に同心円文当具痕がみられる。38・47は杯B蓋である。38は口縁部が丸く垂下し、端部も丸くおさめる。47は口縁部が垂下せず、端部を丸くおさめる。46は杯Aである。46は底部で、ヘラ切り後未調整である。44は壺蓋である。口縁部は外反する。天井部はロクロケズリを施す。40は甕の口縁部で、端部を丸くおさめる。

時期は44が8世紀後葉、38・41・46が9世紀前葉から中葉、47が9世紀後葉、その他は8世紀から9世紀と推定される。

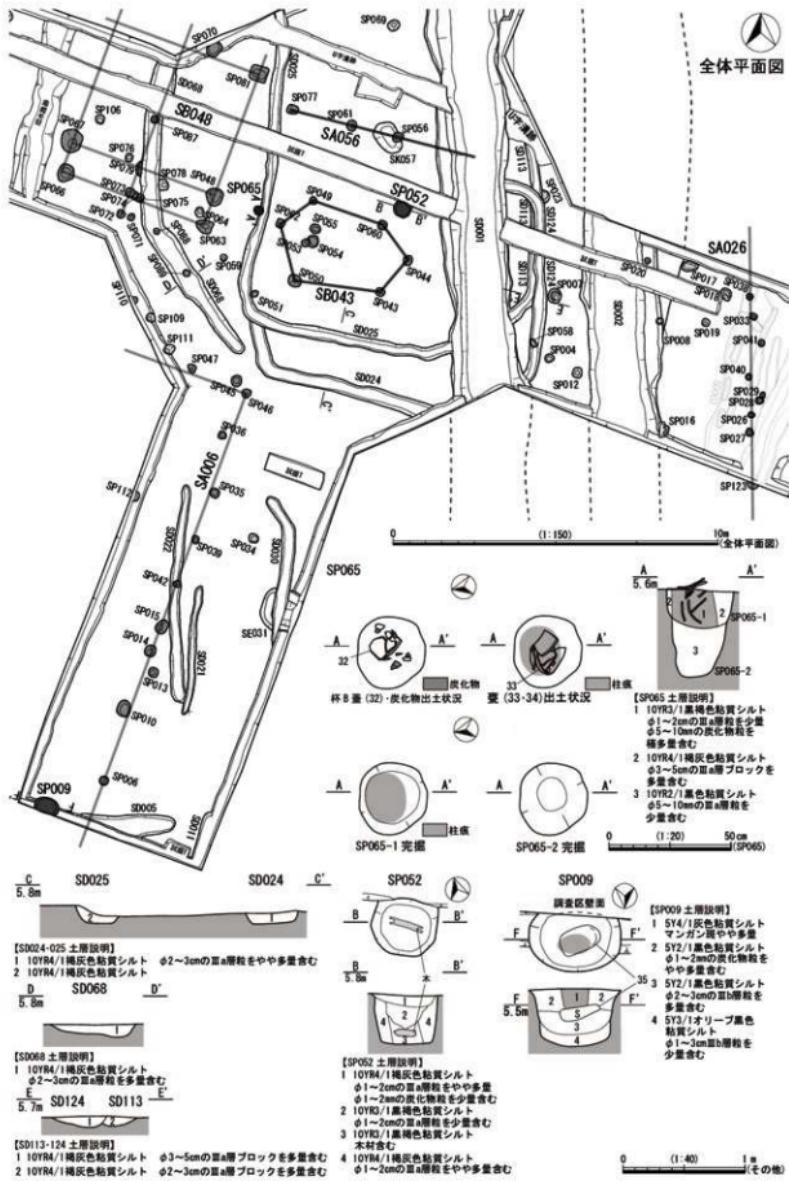
SA056はSP056・061・077で構成され、東へ延びるとSD124へつながり、SB043の北側の区画と推測される。SP056とSP077間は約3.5mである。

以上からSB043とこれを区画する溝とSA056はセットとする施設が想定される。このことはSB043の北西側のSP052とSP065の特殊遺構からも窺い知ることができる。

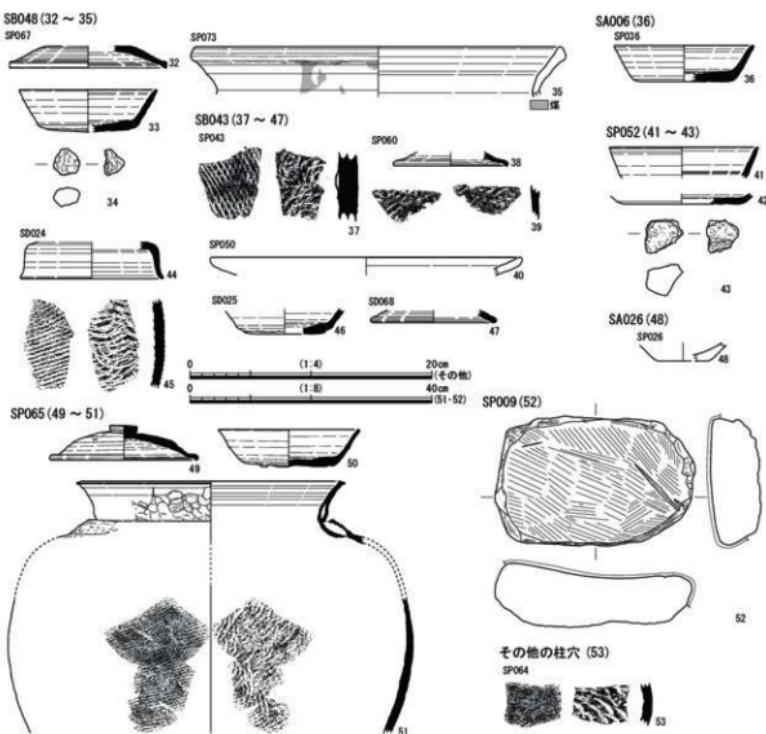
時期は9世紀前葉から中葉と推定される。

SP052 墓土は4層からなり、3層内に木材が横たわっていた。1～3層は後で埋設された可能性がある。

遺物は須恵器(41・42)・鍛冶関連遺物(43)を図示した。41は杯Aまたは杯B身である。41は口縁部外面に1条の凹線を巡らせる。42は杯Aである。42は底部で、ヘラ切り後未調整である。43



第12図 据立柱建物・柵列平面図・断面図



第13図 掘立柱建物・柵列出土遺物図

は鉄滓である。時期は遺物から9世紀前葉から中葉と推定される。

SP065 検出状況は上面に杯B蓋と炭化物粒が出土した。埋土は3層に分かれ。1層は杯B蓋と炭化物粒が多く含まれ、2層は柱痕で杯A、甕片が多く出土した。甕片は被熱を受けて表面がはじけしており、上層の炭化物粒との関連性が指摘される。堆積状況は柱材を抜き取った後に完形の杯A、甕片が入り込み、上層に杯B蓋と炭化物粒が覆っている。

遺物は須恵器(49・50)、甕(51)を図示した。49は杯B蓋である。口縁端部は丸くなり、つまみはボタン状を呈する。天井部外面にはロクロケズリを施す。50は杯Aである。体部の傾きがやや大きく、底部はヘラ切り後未調整である。51は甕である。被熱によって表面が剥離し、またひぶくれも多くみられる。

時期は、51が8世紀後葉から9世紀前葉、49・50が9世紀前葉から中葉と推定される。

SP009 調査区南端で検出されたが、建物として並ばなかった。埋土は4層からなり、2層は柱痕で下に礎石が出土した。埋土はさらに3・4層とみられ、1～2回程度建て直しを行っている。遺物は石製品(52)を図示した。52は上面と側面を底面とし、礎石を礎石に転用したものである。

時期は土師器片から8世紀から9世紀と推定される。

SA026 SP26 ~ 29・33・38・40・41・123 から構成される。軸は概ね SD001・002 と平行することから SD001・002 に関連するものと考えられる。

遺物は弥生土器 (48) を図示した。48 は径の小さい甕の底部である。時期は弥生時代終末期と推定され、混入と考えられる。

その他の柱穴出土遺物 須恵器 (53) を図示した。53 は横瓶の胴部片である。外面に平行タタキ後カキメ、内面に同心円文当具痕がみられる。時期は 8 世紀後葉から 9 世紀前葉と推定される。

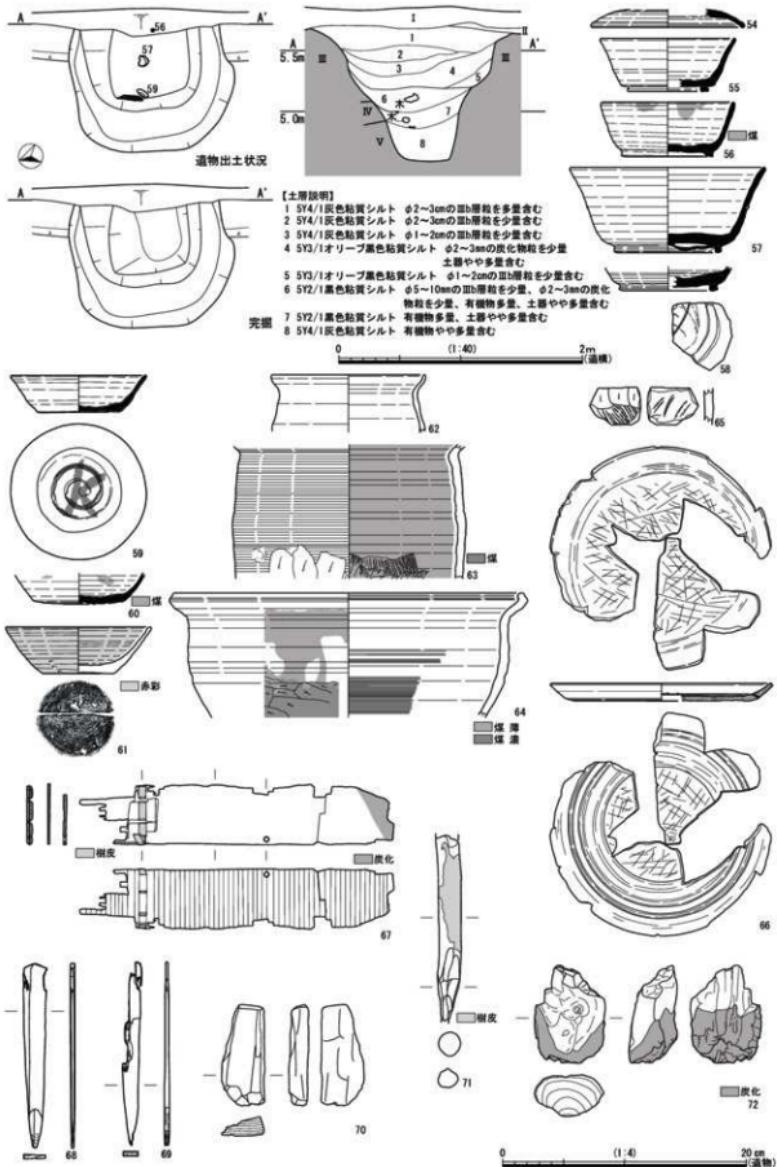
(3) 井戸

SE031(第 14 図、写真図版 3・5・6・7・10)

E-4 グリッドに位置する。SD030 に切られ、東半分は調査区外にある。検出面はⅢ層である。平面形は隅丸方形、断面形は有段状である。規模は上面の南北が 1.38m、中段の南北が 0.96m、底面の南北が 0.30m、深さは底面まで 1.11m、中段まで 0.48m である。埋土は 8 層に分かれ、大別すると、①灰色粘質シルト (1 ~ 3 層)、②オリーブ黒色粘質シルト (4・5 層)、③黒色から灰色粘質シルト (6 ~ 8 層) の 3 つに分かれれる。①と②は須恵器と土師器が出土し、③からは須恵器と土師器の他に木製品、特に植物遺体を多く含んでいる。

遺物は須恵器 (54 ~ 60)、赤彩土器 (61)、古代土師器 (62 ~ 65)、木製品 (66 ~ 72) を図示した。54 は杯 B 蓋である。口縁端部は丸く、内面の段は不明瞭である。天井部はヘラ切り後未調整である。55 ~ 58 は杯 B 身である。55・56 は器形・法量ともに概ね同様である。高台は、55 が底部縁辺よりやや内側に貼り付け、56 は底部縁辺に貼り付けられる。底部は両者ともヘラ切り後未調整である。56 は口縁部に煤が付着している。57 は口径に対して器高が高いタイプである。体部はやや開き、口縁部にかけて緩やかに外反する。高台は底部縁辺よりやや内側に貼り付けられる。器壁には火ぶくれがいくつかみられる。底部はヘラ切り後未調整である。58 は高台が底部縁辺に貼り付けられる。底部にはヘラ記号「-」を線刻する。59・60 は杯 A である。59 は底部に墨書「K」がみられる。体部はやや開き、底部はヘラ切り後未調整である。60 は口縁部を欠損する。外外面の一部に煤が付着している。61 は土師質赤彩土器の碗である。赤彩は外外面に施される。体部下半から底部にはロクロケズリを施す。62 は小型の甕である。口縁部は内湾させて端部を短く上方に曲げる。成形はロクロナデで、摩耗のため調整は確認できない。63 は甕の頸部から胴部片である。外面にはカキメ後に下半において縦方向のヘラケズリを施す。内面には下半に縦方向の板ナデを施し、全体に煤が厚く付着する。64 は鍋である。頸部は外反し、口縁端部は上方に屈曲させる。端部は方形を呈し、側面には 1 条の沈線がみられる。口縁部から胴部上半はロクロ成形で、胴部下半は外面に斜め方向のヘラケズリ、内面にカキメを施す。頸部から胴部外面に煤が付着し、胴部下半にはより厚く付着している。65 は甕の胴部片である。外面にヘラケズリと平行タタキ、内面に同心円文当具痕がみられる。66 は皿で、器面にはロクロケズリと不定方向に調整痕がみられる。底部には高台がケズリ出される。底部と体部の境に孔が穿たれる。67 は曲物である。内面に縦に筋を刻み輪っかを作り、重なる部分は樹皮で留める。孔が 1 箇所確認でき、欠損部分にもう 1 箇所対になる孔が想定される。欠損部分には炭化した部分がみられる。68・69 は畜串である。上部に斜めにカットを入れ、下部は先端が尖るようにケズリを施す。70 は加工材の一部で、用途不明である。71 は樹皮付の枝の先端をケズリ尖らせる。72 は部分的に粗く加工され、先端が炭化している。

時期は、55 ~ 60 が 9 世紀前葉から後葉、61・62 が 9 世紀中葉、66 は 9 世紀中葉から後葉、54・63 ~ 65 は 9 世紀後葉である。



第14図 SE031 平面図・断面図、出土遺物図

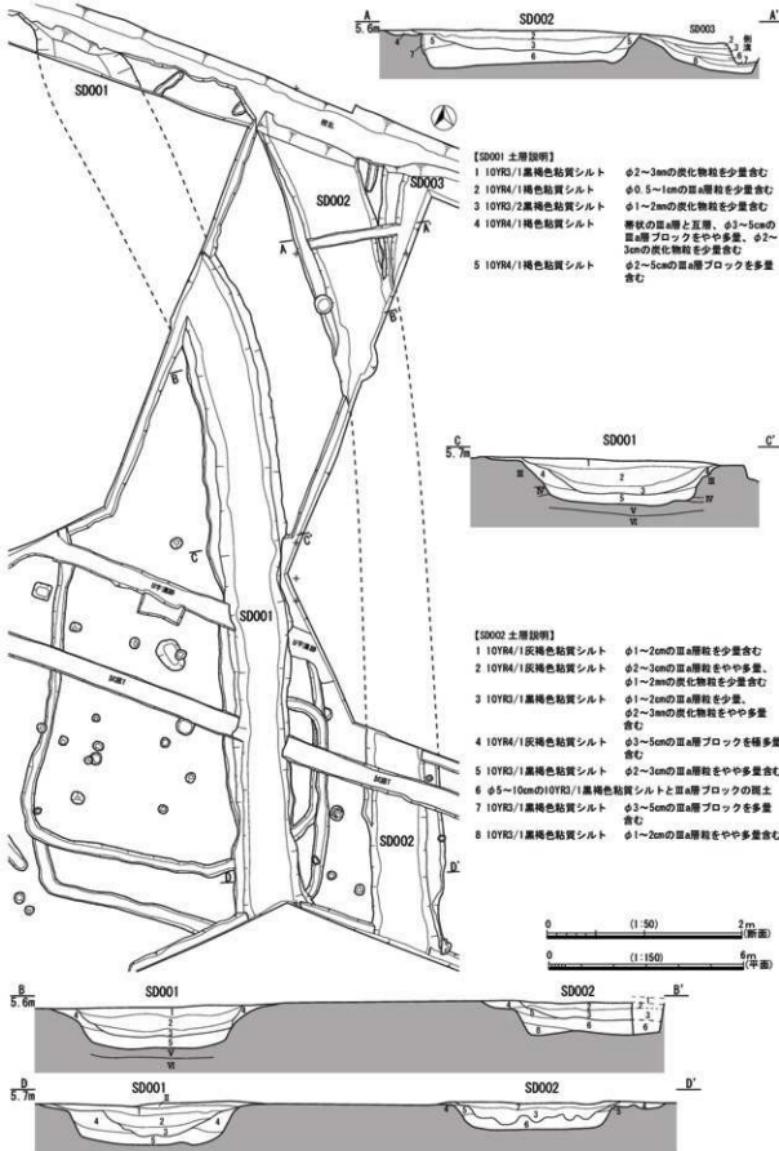
(4) 溝

SD001・002(第15・16図、写真図版4・7・8・10)

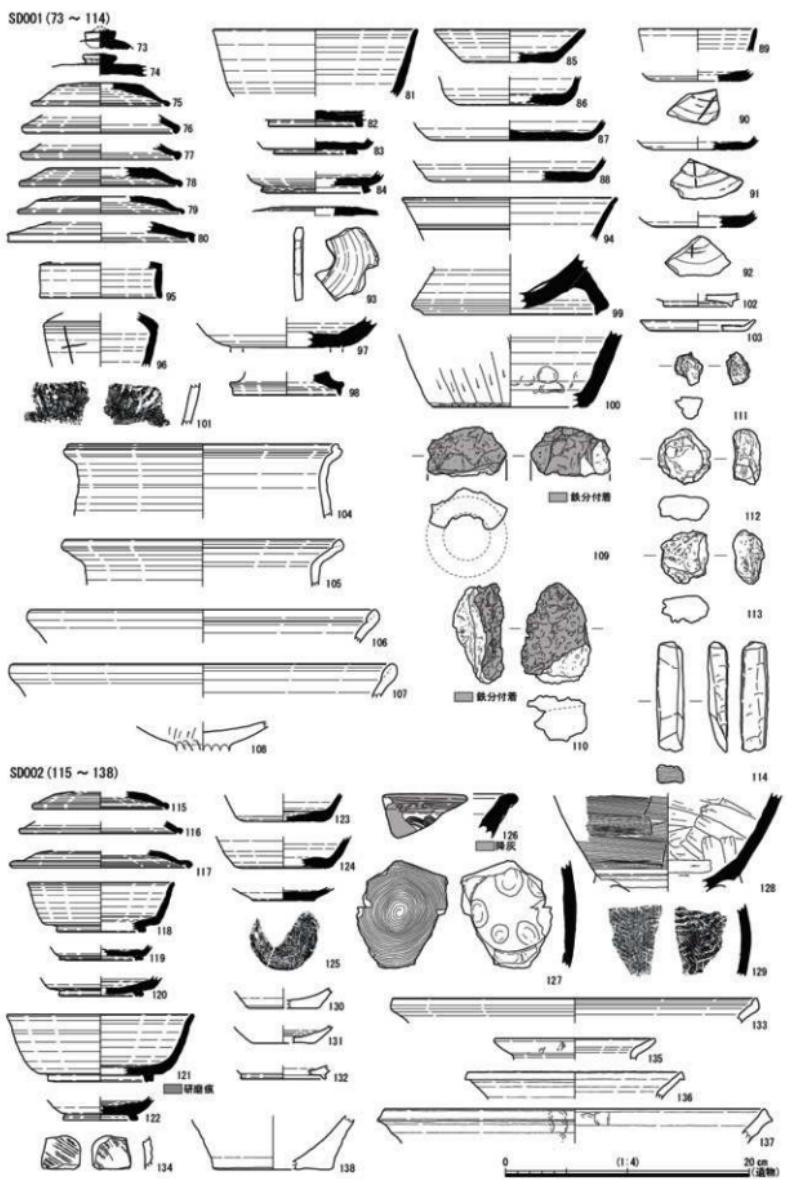
SD001はB-3、B・C・D・E-4グリッド、SD002はB-4、B・C・D・E-5に位置し、両溝とも北と南に分断して検出された。SD001はSD24・25・113・124を切り、SD002はSP008・020・SD119・120を切り、SP117に切られる。検出面はⅢ層である。平面形は南から北西方向へ緩やかに湾曲し、両溝は幅2.08～2.48mの間隔をあけて平行する。ここでは両溝が平行していることから2重の溝と判断した。断面形は両溝とともに箱状で、両岸が浅くなる形状を呈する。幅は、SD001が1.80～2.40m、SD002が2.00～2.57m、概ね同じ幅であるが、深さは、SD001が0.39～0.64m、SD002が0.27～0.45mである。埋土は、SD001が5層、SD002が8層に分かれ、両溝とも灰褐色から黒褐色粘質シルトを主体とする。堆積状況は大きく①1～3層と②4～8層の2つに分かれる。①はⅢ層粒がほとんど含まれず、単一の土層である。これに対して、②はⅢ層粒・ブロックが多量に含まれ、斑土状を呈しており、溝の壁から底面を覆うように堆積する。堆積状況から、①は自然堆積であるが、②は人為堆積と推察される。この根拠として、溝の掘方底面の高さが北より南が低くなっている、水の流れと逆転することにある。よって、溝の掘方は人為的に掘削し、何らかの理由から埋土②で整地を行い、溝として完成させたと推察される。

遺物は①に多く含まれ、②にはほとんど含まれず、また、①でも上層ほど多く、下層ほど少くなる傾向がみられる。SD001は須恵器155点・土師器143点・鉄滓52点・フイゴ羽口1点・炉壁15点、SD002は須恵器154点・土師器317点・鉄滓205点・フイゴ羽口37点・炉壁24点出土する。また、珠洲等が1層から出土しているが、混入と考えられる。注目点は、SD002の北側では鉄滓・フイゴ羽口・炉壁等、鍛冶関連遺物が多く出土し、特に1層から多く出土する点である。周辺では製鉄関連の遺構は確認されておらず、なぜ鉄滓が溝の上層に多く出土するのか疑問が残る。南東の太閤山丘陵では時期が概ね共通する須恵器窯や製鉄関連遺構が多数確認されていることと関連しているのか注目される。

SD001出土遺物 SD001は須恵器(73～100)・古代土師器(101～107)・古墳土師器(108)・鍛冶関連遺物(109～113)・木製品(114)を図示した。73・74は杯B蓋のつまみである。73は貼り付け面と最大幅が同じで、74は貼り付け面と最大幅が異なる。75～80は杯B蓋である。75～79は口縁部を丸く折り曲げ、端部を丸くおさめる。天井部はヘラ切り後未調整である。80は口縁部を垂下させ、外面に強い稜を有する。端部は明瞭で、五角形を呈する。天井部にはロクロケズリを施す。81～84は杯B身である。81は口縁部から体部で、体部はやや開く。82～84は底部で、高台は底部縁のやや内側に貼り付ける。底部はヘラ切り後未調整である。82は内面に剥離痕がみられる。85・86は杯Aである。底部はヘラ切り後未調整である。85は体部が大きく傾き、器高は低い。86は底部のみで、体部の傾きは小さい。89は杯Aまたは杯B身である。口径と体部の傾きが小さい。87・88は盤で、底部のみである。底部はヘラ切り後未調整である。90～92は杯Aの底部で、底部外面にヘラ記号「-」を線刻する。93は杯B蓋の天井部で、割れ面を加工し、再利用されている。94は沈線模で、口縁部に1条、体部に2条の沈線を巡らせる。体部の傾きは大きい。95は壺蓋である。天井部から口縁部は下方へ屈曲させ、天井部と口縁部の境には強い稜を有する。天井部にはロクロケズリを施す。96は瓶の胴部である。肩部は強く折れ、稜を有する。肩部には2条の凹線を巡らせる。胴部にヘラ記号「×」を線刻する。97～99は瓶の底部である。97は台部を欠損し、98と類似する台部が張り付く。底部には台部が剥離した痕跡が残る。外面はロクロケズリを施す。98は台部のみである。99は丸底に内端接地の大型の台が貼り付けられる。100は壺の底部である。胴部外面に縱方向のヘラケズリを施す。101は甕の胴部で、摩耗を受けている。外面に平行タタキ、



第15図 SD001・002 平面図・断面図

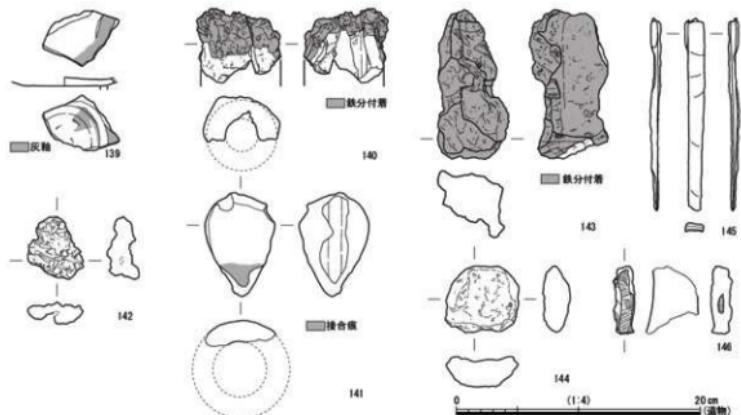


第16図 SD001・SD002出土遺物図(1)

内面に同心円文当具痕がみられる。102は高台を有する椀である。103は平底の皿で、体部から口縁部は外反する。104・105は甕である。104は口縁端部に1条の沈線が巡る。105は口縁端部を内側に折り曲げ、内面に貼り付ける。106・107は鍋である。口縁端部の形状は105と類似する。107は高杯の杯部と脚部との接合部である。外面に板ナデと指圧痕がみられる。109はフイゴ羽口である。復元径は外径約7.0cm、内径約4.0cmである。110は炉壁である。111～113は鉄滓である。111は発泡が多くみられ、軽石のようである。112・113は楕型鉄滓である。114は加工材である。

時期は、80・94～97・99・100が8世紀後葉、74が8世紀後葉から9世紀前葉、73・75～79・81～93が9世紀前葉から中葉、101が8世紀後葉から9世紀中葉、102～107が9世紀後葉、108が古墳時代前期、109～114は8世紀から9世紀と推定される。

SD002 出土遺物 須恵器(115～129)・古代土師器(130～134)・古墳土師器(135～138)・灰釉陶器(139)・鍛冶関連遺物(140～144)・木製品(145)・石製品(146)を図示した。115～117は杯B蓋である。口縁部は丸く折り曲げ、端部を丸くおさめる。天井部はヘラ切り後未調整である。118～122は杯B身である。118は高台が底部縁辺より内側に貼り付けられ、体部の傾きは小さく、器高は低い。119・120は底部のみで、119は高台が底部縁辺に貼り付けられ、120の高台は118と類似する。両者とも底部はヘラ切り後未調整である。121・122は体部が楕状を呈する。121の底部内面には研磨痕がみられる。123～124は杯Aである。体部はやや開き、底部はヘラ切り後未調整である。125は平底椀の底部である。底部外面に糸切り痕がみられる。126は甕である。外面に突帯と波状文がみられ、表面に灰が厚く付着する。127は横瓶で、側面の栓の部分である。外面にカキメを施し、内面に接合時の指圧痕がみられる。128は瓶である。SD001-96の台が貼り付けられる。外面は横方向のハケメ、内面に板ナデを施す。129は横瓶の胴部片である。外面に平行タタキ後カキメ、内面に同心円文当具後カキメを施す。130・131は平底の椀である。摩耗しているが、底部に糸切り痕が想定される。132は高台を有する椀である。133・134・136は甕である。133は小型で、口縁端部は丸くおさめる。136・137は口縁端部が方形を呈する。135は甕で、口縁端部が方形を呈し、内側を上方に上げる。134は甕胴部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円文当具痕がみられる。138は壺底部である。径が大きい平底である。139は椀または皿である。体部には内外面とともに灰釉が施



第17図 SD002 出土遺物図(2)

され、内面の見込みは露胎、高台内の一帯にも施されている。高台は剥離し、底部外面にはロクロケズリを施す。140・141はフイゴ羽口である。140の復元径は外径が約6cm、内径が約3cmである。141は土師質で、外面に接合痕がみられる。復元径は、外形が約8cm、内径が約4cmを測る。143は炉壁である。142・144は鉄滓である。142は発泡しており、軽石のようである。144は楕円形鉄滓である。145は板状の加工材である。146は砥石である。

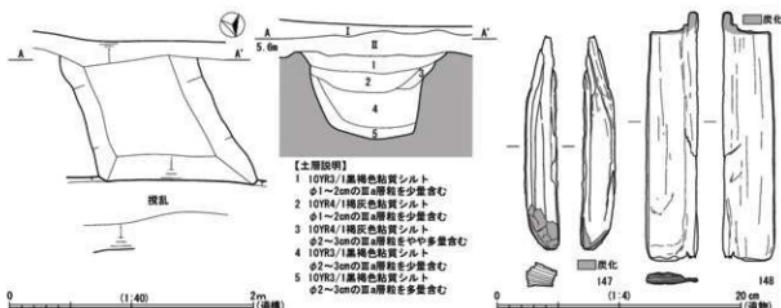
時期は、133・135・136・138が古墳時代前期、118・126～129が8世紀後葉、115～117・119・120・123・124が9世紀前葉から中葉、121・122が9世紀中葉、139が9世紀中葉から後葉、125・130～132・135・137が9世紀後葉、140～146が8世紀から9世紀と推定される。

SD037(第18図、写真図版4・10)

C-6グリッドに位置し、北側の道路側溝により切られ、南側は調査区外にある。平面形は検出範囲において南北方向に直線的であるが、湾曲や蛇行することも考えられる。断面形はU字状を呈する。埋土は5層に分かれ、黒褐色粘質シルトを主体とする。規模は幅は1.03m、深さは0.64mである。

遺物は木製品(147・148)を図示した。147は割材で、下端が被熱により炭化している。付け木の可能性も考えられる。148は板材で、上端が被熱により炭化している。147・148は火災等による炭化と付け木による炭化の可能性が考えられ、表面観察ではどちらとも判断できない。

時期は須恵器片から8世紀から9世紀と推定される。



第18図 SD037 平面図・断面図・出土遺物図

第4項 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物（第20図、写真図版9）

ここでは古代から近世までの遺構外出土遺物について併せて掲載する。古代は149～156、中世は157～160、近世は161である。

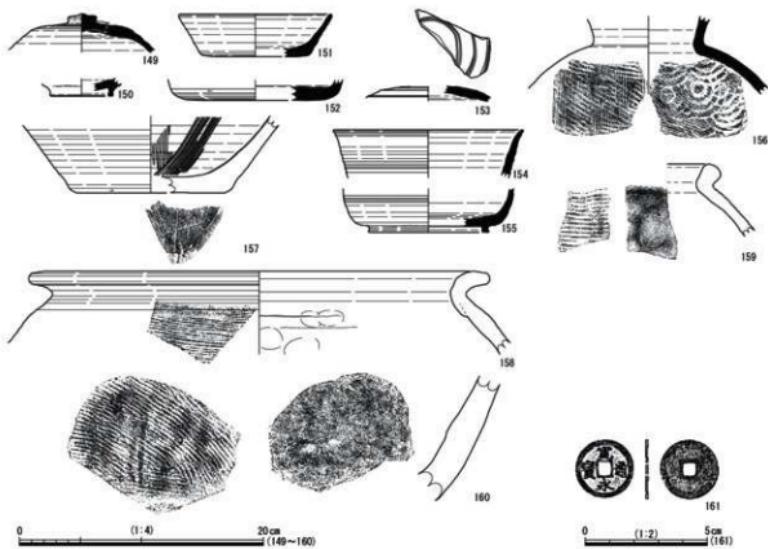
古代 149は杯B蓋で、ゆがみが大きく、口縁部を欠損する。つまみはボタン状を呈し、中央部がわずかに尖る。天井部のロクロケズリは省略され、ヘラ切後ナデ調整を行っている。天井部の高さは高くなっている。150は輪高台であるが、杯B身とは異なっており、高台径が小さく、つくりもやや丁寧である。151は杯Aである。底部はヘラ切後ナデ調整を行う。体部の傾きはやや大きく、口縁部まで直線的である。152は盤の底部である。底部外面はロクロケズリを施す。156は横瓶である。胴部外面は平行タタキ後カキメを施し、内面には同心円文当具痕がみられる。153～155は杯Bで

沈線を装飾したものである。153は蓋である。天井部にはロクロケズリを施し、2条圈線を3重に装飾する。154は身である。体部外面中央に3条の沈線と口縁部外面に1条の沈線を装飾する。体部の傾きはやや小さい。155は身である。体部外面中央に2条の沈線を装飾する。高台は底部縁辺より内側に貼り付け、丁寧なつくりをしている。体部の傾きは小さい。

時期は、152～156が8世紀後葉から9世紀前葉、149・151が9世紀前葉から中葉、150は丁寧なつくりであることから8世紀代と推定される。

中世・近世 157は珠洲の播鉢で、底部は静止糸切りである。底部と体部の内面に櫛描きによる播目が施され、1単位14条である。播目はややシャープさがみられる。内面は全体的に使用痕で摩耗している。158は大型の甕である。口縁部は外方に大きく屈曲し、内面に浅い溝状の凹みが生じる。胴部外面には頭部からやや下がった位置から平行タタキを施し、タタキの溝はシャープである。内面にはタタキに伴う当具痕がみられる。159は珠洲の甕で、小片であるため径を復元できないが、口縁部は短く屈曲し、くの字状を呈する。胴部外面には頭部直下まで平行タタキがおよび、タタキの溝は幅広である。内面には当具痕が明瞭にみられる。160は甕胴部下半の小片である。外面には平行タタキ、内面には当具痕後に横ナデを施し、粘土帶のつなぎ目に指圧痕が残る。161は寛永通宝である。裏面は無文である。

時期は157が珠洲編年のII～III期、158がI～II期、159がIV～V期と推定される。



第19図 遺構出土遺物図

第2表 遺構一覧表(1)

弥生・古墳時代の遺構

遺構名	グリッド	規模(x) 長軸 短軸(幅)	深さ	断面 形状	重複関係	出土遺物	
						有	無
SD 003	B5-05-06-E5-E6	(9.00)	5.50	0.55	直状	SP026-027-028-029-033-038- SD063-096を切られる	○弥生土器・須恵器・土師器・木製品 ○須恵器開削
SD 092	C2-02	(7.30)	0.45~0.92	0.20	直状	SD093-096を切る	○弥生土器
SK 090	C2	(1.05)	1.05	0.77	逆三角状	—	○弥生土器

奈良・平安時代の遺構

遺構名	グリッド	規模(x) 長軸 短軸(幅)	深さ	断面 形状	重複関係	出土遺物	
						有	無
SI 100	C2-C3-D2-D3	3.18	2.80	0.10	直状	SP085に切られる	○須恵器・土師器
SK 032	C2-C3-D2-D3	1.60	1.40	0.22	梯状	—	○土師器
SP 043 D4	D4	0.28	0.25	0.11	U字状	—	○須恵器・土師器
SP 044 D4	D4	0.32	0.28	0.24	U字状	—	○須恵器
SP 049 D4	D4	0.25	0.23	0.14	U字状	—	○須恵器
SP 050 D4	D4	0.28	0.17	0.19	U字状	—	○土師器
SP 060 D4	D4	0.30	0.30	0.11	U字状	—	○須恵器
SP 062 D4	D4	0.30	0.30	0.20	U字状	—	○
SP 056 D4	D4	0.35	0.30	0.12	U字状	SK057を切る	○土師器
SA056 SP 061 D4	D4	0.35	0.30	0.34	U字状	—	○
SP 077 D4	D4	0.35	0.27	0.26	U字状	—	○
SD 024	B3-B4-E4	(6.45)	0.38~0.50	0.09	直状	SD001-025に切られる	○須恵器・土師器
SD 025	C4-B3-B4	(15.85)	0.25~0.48	0.26	直状	SD024を切る SP065-SD001に切られる	○須恵器・土師器
SD 068	C3-C3	(9.70)	0.45~0.74	0.10	直状	SP078-079-087-088-089を切る	○須恵器・土師器
SD 113	D4-B5	(5.90)	0.37	0.26	直状	SD001-124に切られる	○須恵器・土師器
SD 124	B4-B5	(6.65)	0.25~0.43	0.09	直状	SP023-056-SD112を切る SD001に切られる	○
SP 048 D3	D3	0.55	0.50	0.13	U字状	—	○土師器
SP 063 D3	D3	0.52	0.40	0.12	U字状	—	○
SP 068 D3	D3	0.56	0.50	0.31	U字状	—	○
SP 067 D3	D3	0.75	0.63	0.41	U字状	—	○須恵器・土師器・木製品・銅冶関連
SB048 SP 070 D4	D4	0.47	0.40	0.09	直状	—	○
SP 072 D3	D3	0.27	0.25	0.24	U字状	—	○
SP 073 D3	D3	0.30	0.27	0.24	U字状	SP074を切る	○土師器
SP 079 D3	D3	0.45	(0.19)	0.13	U字状	SD065に切られる	○土師器
SP 081 D4	D4	0.58	0.47	0.28	U字状	—	○
SP 087 D3	D3	0.28	0.25	0.09	U字状	—	○
SP 086 F3	F3	0.38	0.35	0.09	U字状	SD068に切られる	○
SP 010 E3-F3	F3	0.50	0.40	0.07	U字状	—	○
SP 012 E3	E3	0.32	0.30	0.13	U字状	—	○
SP 014 E3	E3	0.37	0.35	0.16	U字状	—	○
SP 015 E3	E3	0.45	0.34	0.25	U字状	—	○土師器
SP 035 E4	E4	0.32	0.30	0.11	U字状	—	○
SA006 SP 036 E4	E4	0.27	0.25	0.10	U字状	—	○須恵器・土師器
SP 039 E4	E4	0.25	0.22	0.19	U字状	—	○
SP 042 E3-E4	E3-E4	0.23	0.20	0.24	U字状	SD022に切られる	○
SP 045 D4	D4	0.35	0.30	0.11	U字状	—	○
SP 046 E4	E4	0.29	0.27	0.12	U字状	—	○木製品
SP 047 D3	D3	0.30	0.23	0.24	U字状	—	○
SP 026 E5	E5	0.20	0.17	0.11	U字状	SD003を切る	○土師器
SP 027 E5	E5	0.27	0.22	0.13	U字状	SD003を切る	○
SP 028 E5	E5	0.25	0.20	0.14	U字状	SD003を切る	○
SP 029 E5	E5	0.18	0.15	0.13	U字状	SD003を切る	○
SA026 SP 033 D6	D6	0.24	0.18	0.14	U字状	SD003を切る	○
SP 038 D5	D5	0.22	0.18	0.23	U字状	SD003を切る	○
SP 040 D5	D5	0.20	0.20	0.13	U字状	SD003を切る	○土師器
SP 041 D5	D5	0.20	0.20	0.18	U字状	SD003を切る	○
SP 123 E5	E5	0.38	0.22	0.21	U字状	SD003を切る	○
SP 009 F3	F3	0.75	(0.47)	0.47	U字状	—	○土師器・石製品
SP 065 D4	D4	0.30	0.28	0.40	U字状	SD025を切る	○須恵器・土師器
SP 052 D4	D4	0.55	(0.45)	0.45	U字状	—	○須恵器・土師器・木製品
SP 004 D5	D5	0.28	0.23	0.20	U字状	—	○土師器
SP 007 D5	D5	0.45	0.40	0.31	U字状	—	○土師器
SP 008 D5	D5	0.23	0.20	0.08	U字状	SD002に切られる	○
SP 012 D6	D6	0.33	0.27	0.29	U字状	—	○土師器
SP 016 E5	E5	(0.33)	(0.13)	0.36	U字状	—	○木製品
SP 017 D5	D5	0.52	0.30	0.15	U字状	—	○土師器
SP 018 D5	D5	0.40	(0.30)	0.12	U字状	—	○
SP 019 D5	D5	0.25	0.23	0.10	U字状	—	○
SP 020 D5	D5	0.18	0.18	0.11	U字状	SP002に切られる	○
SP 023 D5	D5	0.40	(0.23)	0.23	U字状	SD124に切られる	○
SP 034 E4	E4	0.33	0.30	0.23	U字状	—	○土師器
SP 051 D4	D4	0.25	0.20	0.13	U字状	—	○
SP 053 D4	D4	0.27	0.23	0.24	U字状	SP054を切る	○
SP 054 D4	D4	0.40	0.37	0.13	U字状	SP053に切られる	○土師器
SP 055 D4	D4	0.33	0.28	0.14	U字状	—	○
SP 056 D4	D4	0.28	0.17	0.11	U字状	SD124に切られる	○
SP 064 D3	D3	0.32	0.25	0.34	U字状	—	○須恵器・土師器

第3表 造構一覧表(2)

奈良・平安時代の造構

造構名	グリッド	規模(n)			断面 形状	重複関係	出土遺物	
		長軸	短軸(幅)	深さ			有	種類
SP 059	D3	—	0.22	0.20	0.11	U字状	—	○
SP 069	C4	—	0.35	0.32	0.17	U字状	—	○
SP 071	D3	—	0.25	0.22	0.16	U字状	—	○
SP 074	D3	—	0.25	(0.13)	0.08	U字状	SP075を切る SP073に切られる	○
SP 075	D3	—	0.25	(0.20)	0.19	U字状	SP074に切られる	○ 土師器
SP 076	D3	—	0.27	0.25	0.1	U字状	—	○
SP 078	D3	—	0.35	(0.28)	0.24	U字状	SD068に切られる	○ 木製品
SP 080	C3	—	0.45	0.33	0.32	U字状	—	○ 土師器・木製品
SP 082	D2	—	0.33	0.28	0.16	U字状	—	○
SP 083	C2	—	0.28	0.22	0.09	U字状	—	○
SP 084	C2	—	0.22	0.17	0.16	U字状	—	○
SP 085	C2	—	0.20	0.20	0.08	U字状	SI100を切る	○ 土師器
SP 086	D3	—	0.17	0.17	0.13	U字状	—	○
SP 088	D3	—	0.20	0.19	0.05	U字状	SD068に切られる	○
SP 089	D3	—	0.23	0.20	0.07	U字状	SD068に切られる	○
SP 095	C2	—	0.22	0.20	0.22	U字状	—	○
SP 099	C2	—	0.23	0.20	0.12	U字状	—	○
SP 101	C2	—	0.28	0.20	0.10	U字状	—	○
SP 102	C2	—	0.22	0.20	0.08	U字状	—	○
SP 103	C1	—	0.30	0.23	0.28	U字状	—	○
SP 104	C2	—	0.20	0.18	0.14	U字状	—	○
SP 105	E4	—	0.58	0.11	0.39	U字状	—	○
SP 106	D3	—	0.30	0.27	0.34	U字状	—	○
SP 107	C3	—	0.23	0.20	0.17	U字状	SD094に切られる	○
SP 108	C2	—	0.24	0.09	0.22	U字状	SD094に切られる	○
SP 109	D3	—	0.30	0.25	0.30	U字状	—	○
SP 110	D3	—	0.22	(0.15)	0.32	U字状	—	○
SP 111	D3	—	0.37	0.30	0.20	U字状	—	○
SP 112	E3	—	0.30	(0.12)	0.32	U字状	—	○
SP 114	B5	—	0.38	0.30	0.28	U字状	SK115・SB116を切る	○
SP 117	C5	—	0.60	0.55	0.40	U字状	SD002を切る	○ 土師器
SP 121	D3	—	0.36	0.24	0.17	U字状	—	○
SE 031	E4	—	1.38	(0.98)	1.11	有段状	SD030に切られる	○ 漢意器・土師器・石製品・木製品
SD 001	B3-B4-C4-E4	(20.30)	0.80-2.40	0.39-0.64	箱状	SD024-025-113-124を切る	○ 漢意器・土師器・石製品・木製品・銀杏開連	
SD 002	B4-B5-C5-D5-E5	(13.05)	2.00-2.57	0.27-0.45	箱状	SP006-020, SD119-120を切る SP117に切られる	○ 漢意器・土師器・木製品・銀杏開連	
SD 037	G6	(1.00)	1.03	0.64	U字状	—	○ 漢意器・土師器・木製品	
SD 005	F3	(2.94)	0.66	0.14	皿状	—	○ 漢意器・土師器	
SD 011	E3-E4	(1.50)	(0.22)	0.10	皿状	—	○	
SD 021	E3-E4-F3-F4	4.00	0.18-0.25	0.12	皿状	—	○	
SD 022	E3-E4-F3	6.65	0.23-0.43	0.07	皿状	SP042を切る	○ 土師器	
SD 030	E4	(4.78)	0.32-0.42	0.06	皿状	SE031を切る	○	
SD 091	C2-D2	(5.07)	0.28-0.50	0.20	被状	—	○ 土師器	
SD 093	C1-C2	(8.50)	0.30-0.40	0.10	被状	SD094を切る SD092に切られる	○ 漢意器・土師器	
SD 094	C2	(5.60)	0.30-0.47	0.23	U字状	SD097, SP108を切る SD093に切られる	○	
SD 096	C2-D2	(3.00)	0.28	0.11	皿状	SD092に切られる	○	
SD 097	C1-C2	(5.00)	0.23-0.58	0.10	皿状	SD094に切られる	○	
SD 098	C1	(1.00)	0.25	0.06	皿状	—	○	
SD 116	B5-C5	(0.55)	0.22	0.24	皿状	SP114・SK115に切られる	○	
SD 118	B4	(1.00)	0.20-0.27	0.11	皿状	—	○	
SD 119	B4	(0.40)	0.35	0.07	皿状	SD002に切られる	○	
SD 120	B5	(0.85)	0.27	0.17	皿状	SD002に切られる	○	
SK 057	B4	1.05	0.70	0.12	皿状	SP056に切られる	○	
SK 115	B5	0.75	(0.25)	0.16	被状	SD116を切る SP114に切られる	○	

その他の時代の造構

造構名	グリッド	規格(n)	長軸	短軸(幅)	深さ	断面 形状	重複関係	出土遺物
								種類
NR 122	D5-E6-E5-E6	—	—	—	0.6以上	皿状	—	○

第4表 遺物観察表(1)

凡例 口：口縁部、口端：口縁端部、体：体部、脚：脚部
天：天井部、杯：杯部、脚：脚部、底：底部

報告番号	グリッド	遺物名	種類	器種 保存部位	法度(cm) () 指定値	成形・調整・装飾	胎土	焼成	色調	備考	
1 D5	S0003-2 1層	弥生土器	壺	口～底	口径：(14.4) 器高：(4.5) 底径：—	内：磨耗、横ナデ、板ナデ 外：横ナデ、板ナデ	密 石英・雲母	細砂少 やや良	内・外：2.5YR/3/淡黄色		
2 D6	S0003-2 1層	弥生土器	壺	口～底	口径：(15.8) 器高：(4.8) 底径：—	横ナデ、横板ナデ 外：横ナデ、横ハケメ	やや密 雲母・石英	細砂多 良	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色		
3 E5	S0003-2 2層	弥生土器	壺	口～底	口径：(15.7) 器高：(5.55) 底径：—	内：手ナデ 外：口～底：横ナデ 横：横ハケメ	やや密 雲母・石英	細砂多 良	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色		
4 D6	S0003-2 2層	弥生土器	壺	口～底	口径：(19.0) 器高：(32.0) 底径：5.0	内：指圧痕、横板ナデ 外：横ナデ、横板ナデ 横：横ハケメ 横：ナナメ板ナデ	やや密 石英	細砂多 良	内：10YR8/2灰白色 外：10YR8/3浅黄褐色		
5 D5	S0003 1層	土師器	高杯 杯・脚	口	口径：(19.0) 器高：(11.4)	内：ナデ 外：—	密 石英・雲母	細砂やや多 少	良	内・外：10YR8/1灰白色	摩耗
6 E5	S0003 2層	土師器	高杯	口	口径：(19.0) 器高：(5.3) 底径：—	内：ミガキ	密	細砂やや多	良	内：10YR7/2にぶい黄褐色	
7 B4	S0003-1 2層	土師器	高杯	口	口径：— 器高：(7.7) 底径：—	内：しぼり、ナデ 外：横板ナデ	密 石英	細砂やや多 少	良	内：7.5YR7/6褐色 外：7.5YR7/3にぶい黄褐色～ 7.5YR7/6褐色	摩耗
8 B4	S0003-1 2層	土師器	高杯	口	口径：— 器高：(6.0) 底径：—	内：しぼり、ナデ 外：指圧痕	密 雲母・石英	—	良	内：10YR8/1褐灰色 外：10YR8/4浅黄褐色	摩耗
9 C4	S0003 一括	土師器	高杯	口	口径：— 器高：(4.85) 底径：—	内：外：—	やや密 雲母	細砂やや多 少	やや良	内：10YR8/2灰白色 外：10YR8/2灰白色 ～10YR8/1褐灰色	摩耗
10 D6	S0003-2 1層	弥生土器	壺	口	口径：(22.9) 器高：(2.0) 底径：—	内：外：—	密	細砂やや多	良	内・外：2.5YR/2灰白色 ～2.5YR/1褐灰色	被熱か 摩耗
11 E5	S0003 2層	土師器	壺	口	口径：— 器高：(3.0) 底径：—	内：外：—	密	細砂少	やや不良	内・外：10YR8/1灰白色	摩耗
12 E5	S0003 2層	土師器	壺	口	口径：— 器高：(2.95) 底径：(5.6)	内：外：—	密 雲母・石英	細砂やや多 少	良	内：10YR8/2浅黄褐色 外：10YR8/2灰白色	
13 B4	S0003-1 2層	土師器	壺	口	口径：— 器高：(1.8) 底径：(2.6)	内：外：指圧痕	密 雲母・長石	細砂少	良	内：2.5YR7/1灰白色 外：2.5YR7/1灰白色	丸底
14 B4	S0003-1 2層	土師器	壺	口	口径：— 器高：(1.85) 底径：—	内：指圧痕 外：横板ナデ 横：横ラケズリ	やや密 雲母	細砂やや多 少	良	内：10YR8/1褐灰色 外：10YR8/1褐灰色	
15 E6	S0003-2 2層	弥生土器	壺	口	口径：— 器高：(2.8) 底径：(4.0)	内：外：横ナデ	粗 石英	細砂多	やや不良	内：2.5YR/2灰白色 外：10YR8/1褐灰色	器面ひび割れ 二枚被熱か 摩耗
22 C2	S0092 1層	土師器	高杯	口	口径：— 器高：(1.65) 底径：—	内：— 外：ナデ	やや密 雲母	細砂やや多 少	やや良	内・外：2.5YR/2灰白色	摩耗
23 C2	S0092 1層	土師器	壺	口	口径：— 器高：(2.1) 底径：—	内：— 外：横ナデ	やや密 雲母・石英	細砂多	良	内：10YR8/1褐灰色 外：10YR8/1褐灰色	摩耗
24 C2	S0092 1層	土師器	壺	口	口径：— 器高：(1.75) 底径：—	内：横ナデ 外：横ナデ	やや密 雲母・石英	細砂やや多 少	やや良	内・外：2.5YR/2灰白色	
25 C2	S0090 一括	土師器	鉢	口～底	口径：(8.0) 器高：(5.7) 底径：(4.15)	内：横ナデ 外：横ナデ、指圧痕 横：横板ナデ	粗 雲母・石英	細砂やや多 少	良	内：10YR8/2灰白色 ～10YR8/1褐灰色 外：10YR8/1褐灰色 ～10YR8/2灰白色	ミニチュア土器
26 C2	S0090 一括	弥生土器	鉢	口	口径：(11.1) 器高：(2.4) 底径：—	内：横ナデ 外：通絞キザミ、横ナデ	密 雲母・石英	細砂少	良	内・外：10YR8/2浅黄褐色	摩耗
27 C2	S0090 一括	土師器	壺	口～底	口径：15 器高：4.1 底径：—	内：外：—	粗 雲母・石英	中砂多	良	内・外：10YR4/3にぶい黄褐色	摩耗
28 D3	S1100-1 1層	須恵器	杯盤	天～口	口径：(13.2) 器高：(1.2) 底径：(10.4)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 石英	細砂少	良	内：N/灰色 外：N/灰白色	
29 D3	S1100-1 1層	須恵器	杯盤	天～口	口径：— 器高：(1.3) 底径：(9.7)	内：ロクロナデ、ヘラ切り 外：ロクロナデ	やや密 石英	細砂少	良	内：N/灰色 外：N/灰白色	粘 転用器
30 D3	S1100-1 1層	土師器	壺	口	口径：— 器高：— 底径：—	内：当真丸 外：平行タキ	粗 石英	細砂多	やや良	内：7.5YR8/4浅黄褐色 外：5YR8/4にぶい黄褐色	摩耗 被熱
31 D2	S0022 1層	土師器	小型壺	口	口径：(8.0) 器高：(0.7) 底径：—	内：外：—	やや密 雲母・石英	細砂少	やや良	内・外：10YR8/2灰白色	摩耗
32 D3	S0067 一括	須恵器	杯盤	天～口	口径：(14.0) 器高：(1.0) 底径：(7.9)	内：ロクロナデ、ヘラ切り 外：ロクロナデ	密	—	良	内・外：N/灰白色	
33 D3	S0067 1層	須恵器	杯	口～底	口径：(11.4) 器高：(3.5) 底径：(8.3)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 石英・雲母	細砂多	やや不良	内：2.5YR/1灰白色 ～2.5YR/3浅黄褐色	ロクロ左回転

第5表 遺物観察表(2)

凡例 口：口縁部、口端：口縁端部、体：体部、胴：胴部
天：天井部、杯：杯部、脚：脚部、底：底部

報告番号	グリッド	遺構名	種類	器種 残存部位	法寸(om) (-) 推定値	成形・調整・装飾	出土	構成	色調	備考
35	B3	SP073 1層	土師器	壺 口	口径:(31.0) 器高:(4.15) 底径:—	内・外・横ナデ 雷舟・石英	やや密 粗砂や多	良 内・外:10YR6/1褐色 外:10YR5/1褐色		
36	E4	SP036 1層	須恵器	杯A 口～底	口径:(11.6) 器高:(3.0) 底径:(6.4)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ ヘラ切りナデ	密	一	やや密 内・外:N6/灰色 外:N7/赤灰色	
37	D4	SP043 1層	須恵器	壺 肩	口径:— 器高:— 底径:—	内:同心円文具 外:平行タタキ	やや密 粗砂や多	不良 内・外:N7/灰白色	火ぶくれ	
38	D4	SP060 1層	須恵器	杯B 口	口径:(9.5) 器高:(1.15) 底径:—	内:外・ロクロナデ	やや粗 粗砂や多	良 内・外:N6/灰色		
39	D4	SP060 1層	須恵器	壺 肩	口径:— 器高:— 底径:—	内:同心円文具 外:平行タタキ	密 石英	粗砂少	やや 不良 内・外:2.5Y8/1灰白色	摩耗
40	D4	SP050 1層	土師器	壺 口	口径:(27.8) 器高:(1.5) 底径:—	内・外:—	やや粗 石英	粗砂や多	良 内・外:10YR8/2浅黄褐色	摩耗
41	D4	SP052 1層	須恵器	杯	口径:(12.6) 器高:(2.55) 底径:—	内・外・ロクロナデ	密	粗砂少	良 内・外:N6/灰色	ロクロ右回転
42	D4	SP052 1層	須恵器	杯A 底	口径:— 器高:(0.95) 底径:(10.8) ヘラ切り	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ ヘラ切り	やや密 粗砂少	やや 良 内・外:N7/灰白色	ロクロ右回転	
44	D4	SD024 1層	須恵器	壺 天井 口	口径:(11.6) 器高:(3.0) 底径:(10.4)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ ヘラ切り 一ロコケズイカ	やや密 粗砂少	やや 良 内・外:N7/灰白色	ロクロ右回転	
45	D4	SD024 1層	須恵器	壺 肩	口径:— 器高:— 底径:—	内:同心円文具 外:平行タタキ一カメ	密	粗砂少	良 内・外:N6/灰色	
46	D4	SD025 1層	須恵器	杯A 底	口径:— 器高:(2.1) 底径:(6.8)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ ヘラ切り	やや密 粗砂少	やや 不良 内・外:2.5Y7/1灰白色	ロクロ右回転	
47	D3	SD068 1層	須恵器	杯B 口	口径:(10.4) 器高:(2.05) 底径:—	内・外・ロクロナデ	密	粗砂少	良 内・外:N6/灰色	ロクロ右回転
48	E5	SP026 1層	土師器	壺 底	口径:— 器高:(1.5) 底径:(4.4)	内・外:—	粗 雷舟・石英	中砂多	良 内:10YR8/2浅黄褐色 外:10YR8/1褐色	摩耗
49	D4	SP065 1層	須恵器	杯B 天～口	口径:12.3 器高:2.85 つま先径(2.3) つま先高:0.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ ロクロゼリ	密	一	良 内・外:N7/灰白色	ロクロ左回転
50	D4	SP065 1層	須恵器	杯A	口径:11.7 器高:3.1 底径:7.9	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ ヘラズシリ	密 長石	粗砂少	不良 内・外:2.5Y8/1灰白色	ロクロ右回転
51	D4	SP065 1層	須恵器	壺 口～胴	口径:(44.4) 器高:(41.5) 底径:—	内・横ナデ、同心円文具 外:横ナデ、平行タタキ	密 石英	粗砂少	良 内・外:10YR7/2にむい黄褐色	剥離、火ぶくれ 接合:SD001-002 破損面に自然鉛
53	D4	SP064 1層	須恵器	壺 肩	口径:— 器高:— 底径:—	内:同心円文具 外:平行タタキ一カメ	やや粗 —	良 内・外:N5/灰色 外:N7/灰白色	墨	
54	E4	SE031 1～6層	須恵器	杯B 天～口	口径:(12.6) 器高:(1.5) 底径:(6.3)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り	密 雷舟	粗砂少	良 内:N6/灰色 外:N5/灰色	
55	E4	SE031 6-7層	須恵器	杯B 身 口～底	口径:— 器高:(2.2) 底径:(7.8) 高台高:(0.4) 高台高:(6.6)	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り ナデ	密	一	やや 不良 内:10YR7/1灰白色 ～10YR7/2にむい黄褐色 外:2.5Y8/1灰白色	ロクロ右回転
56	E4	SE031 7層	須恵器	杯B 身 口～底	口径:(11.0) 器高:4.45 底径:— 高台高:7.55 高台高:0.45	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り	やや粗 石英・長石	中砂多	やや 不良 内・外:2.5Y8/1灰白色	口:煤
57	D4-E4	SE031 6層	須恵器	杯B 身 口～底	口径:16.0 器高:7.0 底径:8.8 高台高:0.55	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り	密 長石・雷舟	粗砂少	やや 良 内:N5/灰色 外:N7/灰白色	接合:SD001 ロクロ左回転 火ぶくれ
58	E4	SE031 1～6層	須恵器	杯B 身 底	口径:— 器高:(2.0) 底径:(2.0) 高台高:0.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り	やや粗 石英	粗砂や多	やや 良 内:2.5Y7/1灰白色 外:N6/灰色	ヘラ記号「-」
59	E4	SE031 3-4層	須恵器	杯A 充形	口径:11.1 器高:3.05 底径:6.9	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り	密	粗砂少	やや 良 内:外:2.5Y7/1灰白色～ 2.5Y8/2灰白色	ロクロ右回転 底:墨書き「KJ」
60	E4	SE031 6-7層	須恵器	杯A 底	口径:— 器高:(2.55) 底径:7.6	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 石英	—	やや 良 内:2.5Y7/2灰黄色 外:2.5Y8/1灰白色	ロクロ右回転 口～体:内煤
61	E4	SE031 6-7層	青釉土器	碗 口～底	口径:12.0 器高:3.8 底径:6.0	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ、ヘラ切り ロクロゼリ	密 石英・雷舟	粗砂や多	良 内・外:10YR8/2灰白色	ロクロ右回転 赤影
62	E4	SE031 1～6層	土師器	壺 口～胴	口径:(12.6) 器高:(4.75) 底径:—	内:ロクロナデ 外:ロクロナデ	やや密 石英	中砂や多	良 内・外:10YR8/2灰白色	摩耗

第6表 遺物観察表(3)

凡例 口：口縁部、口端：口縁端部、体：体部、脚：脚部
天：天井部、杯：杯部、脚：脚部、底：底部

報告番号	グリッド	遺物名	種類	器種 残存部位	法量 (cm) () 指定値	成形・調整・装飾	胎土	焼成	色調	備考	
63	E4	SE001 7-1層	土師器	壺 肩～頸	口径：— 器高：(11.0) 基盤：—	内：横板ナデ、横板ナデ 外：横板ナデ、横板ナデ	密 粗砂少	良 内・外：10YR7/2にぶい黄褐色	焼		
64	E4	SE001 6-1層	土師器	壺 口～肩	口径：(28.8) 器高：(10.2) 基盤：—	内：ロクロナデ、カキメ 外：ロクロナデ、ケズリ 口端：(茶)	密 — 露母・石英	良 内：2.5Y6/3にぶい黄色 外：2.5Y7/3浅黄色	ロクロ右回転 焼		
65	E4	SE001 7-0層	土師器	壺 肩	口径：— 器高：(11.0) 基盤：—	内：同心円文出島 外：横板ナデ、平行タタキ	やや密 粗砂少	良 内：7.5Y8/4にぶい黄色 外：7.5Y8/4にぶい黄色	被熱		
73	D4	SD001 3層	須恵器	杯形 つまみ	口径：— 器高：(1.15) 底径：—	内：— 外：ナデ	密 —	良 内・外：3H/灰色	被熱による剥離 やがれ 自然踏		
74	D4	SD001 2層	須恵器	杯形 つまみ	口径：— 器高：(1.8) 底径：—	内：ロクロナデ一定ナデ 外：ナデ、ロクロケズリ	やや密 粗砂少	やや 露母・石英 不良	内・外：3H/灰白色 つまみ：やがれ		
75	D4	SD001 2層	須恵器	杯形 天～口	口径：(11.4) 器高：(1.9) 天径：(7.3)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 粗砂少	やや 長石・石英 良	内・外：3H/灰白色 ~3H/灰色	ロクロ右回転	
76	D4	SD001 1層	須恵器	杯形 口	口径：(12.9) 器高：(1.5) 底径：—	内：外：ロクロナデ	やや密 粗砂少	良 内・外：3H/灰色			
77	D4	SD001 1層	須恵器	杯形 口	口径：(13.2) 器高：(1.3) 底径：—	内：外：ロクロナデ	やや密 粗砂少	やや 良	内：N6/灰色 外：N5/灰色		
78	D4	SD001 3層	須恵器	杯形 天～口	口径：(13.4) 器高：(1.5) 天径：(9.1)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 —	良 内：N7/灰白色 外：N6/灰色	ロクロ右回転		
79	D4	SD001 1層	須恵器	杯形 天～口	口径：(13.6) 器高：(1.4) 天径：(10.7)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 粗砂少	やや 良	内・外：3H/灰白色	ロクロ右回転	
80	C4	SD001 3層	須恵器	杯形 天～口	口径：(15.3) 器高：(1.6) 底径：—	内：外：ロクロナデ	やや密 粗砂少	やや 良	内・外：3H/灰白色	ロクロ右回転	
81	C4	SD001 5層	須恵器	杯身 口～体	口径：(16.8) 器高：(5.5) 底径：—	内：外：ロクロナデ 外：ロクロナデ	密 粗砂多	良 石英 N7/灰白色 外：N5/灰色			
82	D4	SD001 1層	須恵器	杯身 底	口径：— 器高：(1.3) 底径：(7.8) 高台高：(0.5)	内：ロクロナデ 外：ヘラ切り	密 —	良 内・外：3H/灰白色			
83	D4	SD001 2層	須恵器	杯身 底	口径：(6.6) 器高：(1.3) 高台径：(8.9) 高台高：(0.4)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 粗砂少	良 内・外：3H/灰白色	ロクロ右回転		
84	D4	SD001 1層	須恵器	杯身 底	口径：— 器高：(1.8) 底径：(9.0) 高台高：(0.6)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 粗砂や多	良 内・外：3H/灰色	ロクロ右回転		
85	D4	SD001 2層	須恵器	杯A 口～底	口径：(12.4) 器高：2.7 底径：(7.8)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ヘラ切り～粗ナデ	やや密 粗砂少 石英	やや 不良	内：SY8/4にぶい褐色 外：SY6/1褐灰色 ~SY7/4にぶい褐色	ロクロ右回転	
86	D4	SD001 2層	須恵器	杯A 体～底	口径：— 器高：(2.35) 底径：(10.1)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ヘラ切り～ナデ	やや密 粗砂多 長石・石英	不良 内・外：7.5Y6/6浅黃褐色	ロクロ右回転		
87	D4	SD001 2層	須恵器	壺	口径：— 器高：(1.7) 底径：(13.0)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 粗砂少	やや 不良	内・外：2.5Y8/1灰白色	ロクロ右回転	
88	C4	SD001 2層	須恵器	壺	口径：— 器高：(2.0) 底径：(14.0)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ヘラ切り～ナデ	密 粗砂少 石英	やや 良	内・外：SY8/1灰白色	ロクロ右回転	
89	D4	SD001 1層	須恵器	杯	口径：— 器高：(1.8) 底径：—	内：外：ロクロナデ	密 —	良 内：N6/灰色 外：N5/灰色			
90	D4	SD001 1層	須恵器	杯A 底	口径：— 器高：(0.95) 底径：(8.7)	内：ロクロナデ 外：ヘラ切り	密 —	良 内・外：5B6/1青皮色	ロクロ右回転 ヘラ記号「-」		
91	D4	SD001 1層	須恵器	杯A 底	口径：— 器高：(1.1) 底径：(9.6)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや粗 中砂や多 石英	やや 不良 内・外：2.5Y6/6褐色	ヘラ記号「-」		
92	D4	SD001 3層	須恵器	杯A 底	口径：— 器高：(1.3) 底径：(7.7)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや粗 中砂や多 石英	やや 不良 内・外：SY7/6褐色	ロクロ右回転 ヘラ記号「-」		
93	D4	SD001 2層	須恵器	杯B 天～口	口径：— 器高：(1.2) 天径：(7.8)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 —	良 内・外：5B6/1明青灰色	破片を軽用		
94	D4	SD001 1層	須恵器	杯B 身～口	口径：(10.0) 器高：(2.6) 天径：(10.0)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ロクロケズリ	密 粗砂少 石英	良 内：5B6/1青灰色 外：5B5/1青灰色	ロクロ右回転		
95	D4	SD001 2層	須恵器	壺	口径：— 器高：(4.4) 底径：(9.4)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、四輪2条 ロクロケズリ	やや密 粗砂少 長石	良 内・外：3H/灰白色	ロクロ右回転		
96	D4	SD001 1層	須恵器	壺	口径：— 器高：—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ	やや密 粗砂や多 長石	良 内・外：3H/灰白色	ヘラ記号「×」		

第7表 遺物観察表(4)

凡例 口：口縁部、口端：口縁端部、体：体部、胴：胴部
天：天井部、杯：杯部、脚：脚部、底：底部

報告 番号	グリッド	遺物名 層位	種類	器種 残存部位	法量 (cm) (↓) 推定値	成形・調整・装飾	胎土	焼成	色調	備考
97	04	S0001 2層	須恵器	瓶 底	口径：— 器高：(2.5) 底径：—	内：ロクロナデ 外：ロクロケズリ ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 石英	粗砂少	内：N7/灰白色 外：N6/灰色～N7/灰白色	ロクロ右回転
98	04	S0001 1層	須恵器	瓶 底	口径：— 器高：(1.9) 底径：(0.8)	内・外：ロクロナデ	やや密	粗砂やや多	内・外：N7/灰白色	
99	04	S0001 1層	須恵器	瓶 底	口径：— 器高：(4.0) 底径：(0.05)	内・外：ロクロナデ	密	—	良 内：N7/灰白色 外：N6/灰色	火ぶくれ・ゆがみ
100	04	S0001 2層	須恵器	壺 底	口径：— 器高：(6.2) 底径：(15.4)	内：ロクロナデ、推圧痕 外：縦板ナデ、横ヶズリ	やや密 長石	粗砂やや多	良 内・外：N7/灰白色	ロクロ右回転
101	04	S0001 1層	土師器	壺 底	口径：— 器高：(5.6) 底径：—	内：同心円文当異一板ナデ 外：平行タタキ一板ナデ	密 雲母	粗砂やや多 石英	良 内：10YR6/3にぶい黄褐色 外：10YR6/2灰黃褐色	
102	04	S0001 1層	土師器	壺 底	口径：— 器高：(1.1) 底径：(5.6)	内・外：—	密 雲母	—	良 内・外：10YR7/6灰黃褐色	摩耗
103	04	S0001 1層	土師器	壺 口～底	口径：— 器高：(0.9) 底径：(0.1)	内・外：ロクロナデ	密 雲母	—	やや 良 内・外：2.5Y8/2灰白色	
104	04	S0001 1層	土師器	壺 口～底	口径：(22.1) 器高：(0.1) 底径：—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、凹線	密 石英・雲母	中砂多	良 内・外：10YR7/3にぶい黄褐色 ～10YR6/3にぶい黄褐色	
105	04	S0001 1層	土師器	壺 口～底	口径：(23.1) 器高：(3.85) 底径：—	内・外：ロクロナデ	密 雲母・石英	粗砂やや多	良 内：10YR8/3淡黄褐色 外：10YR7/3にぶい黄褐色	
106	04	S0001 1層	土師器	壺 口	口径：(26.9) 器高：(2.75) 底径：—	内・外：ロクロナデ	やや密 石英	粗砂やや多	良 内・外：10YR8/2灰白色	
107	04	S0001 1層	土師器	壺 口	口径：(31.9) 器高：(2.75) 底径：—	内・外：ロクロナデ	密 雲母	粗砂やや多 石英	良 内：7.SYR6/4にぶい黄褐色 外：10YR6/4にぶい黄褐色	
108	04	S0001 3層	土師器	高杯 底	口径：— 器高：(2.3) 底径：—	内：— 外：縦板ナデ、横板ナデ	やや密 雲母	粗砂多	やや 良 内・外：7.SYR7/6橙色	摩耗
115	05	S0002 1層	須恵器	杯8面 天～口	口径：(11.0) 器高：(1.4) 底径：(0.0)	内・外：ロクロナデ ヘラ切り一ナデ	やや密 石英	粗砂少	良 内：3S～6/灰色 外：N6/灰色	ロクロ右回転
116	05	S0002 2層	須恵器	杯8面 口	口径：(13.4) 器高：(1.0) 底径：—	内・外：ロクロナデ	密	粗砂少	良 内・外：N6/灰色	ロクロ右回転
117	04	S0002 1層	須恵器	杯8面 天～口	口径：(15.0) 器高：(1.4) 底径：(10.9)	内：ロクロナデ、ヘラ切り 外：ロクロナデ、糸切り ヘラ切り	密	粗砂少	やや 良 内：N6/灰色 外：N7/灰白色	ロクロ右回転 摩耗
118	04	S0002 1層	須恵器	杯8面 口～底	口径：(12.0) 器高：(4.05) 底径：(7.3)	内・外：ロクロナデ	やや密	粗砂少	良 内：N7/灰白色 外：N6/灰色	ロクロ右回転
119	04	S0002 1層	須恵器	杯8面 底	口径：— 器高：(1.25) 底径：(3.4) 高台高：(0.4)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 石英	—	やや 良 内・外：N6/灰色	ロクロ右回転
120	04	S0002 2層	須恵器	杯8面 底	口径：— 器高：(1.65) 底径：(0.9)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 石英	粗砂少	良 内：N7/灰白色 外：N6/灰色	ロクロ右回転
121	E5	S0002 2層	須恵器	杯8面 口～底	口径：— 器高：(5.5) 底径：(10.2) 高台高：(0.6)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 石英	中砂やや多 粗砂少	良 内：N7/灰白色 外：N5/灰色～N7/灰白色	ロクロ右回転
122	C4	S0002 1層	須恵器	杯8面 底	口径：— 器高：(1.9) 底径：(3.05)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 石英	—	やや 不良 内：N6/灰色	ロクロ右回転
123	C4	S0002 1層	須恵器	杯8面 体～底	口径：— 器高：(2.25) 底径：(7.9)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 雲母	—	不良 内・外：SYR8/1灰白色	
124	B5	S0002 1層	須恵器	杯8面 体～底	口径：— 器高：(2.6) 底径：(5.0)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密	粗砂やや多	良 内：N7/灰白色 外：N6/灰色	ロクロ右回転
125	C4	S0002 2層	須恵器	瓶 底	口径：— 器高：(1.05) 底径：(2.4)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、糸切り	やや密 —	—	やや 良 内・外：N7/灰白色	ロクロ右回転 摩耗
126	E5	S0002 2層	須恵器	壺 底	口径：— 器高：(2.6) 底径：—	内：横ナデ 外：横ナデ、突突、皮吹文	密 石英	粗砂少	良 内・外：N5/灰色	舞灰
127	B5	S0002 2層	須恵器	横瓶 底	口径：— 器高：(3.05) 底径：—	内：推圧痕、横ナデ 外：カキメ	やや密 長石	粗砂やや多	良 内・外：N7/灰白色	
128	B4・D4	S0002 2層	須恵器	瓶 底～底	口径：— 器高：(3.05) 底径：—	内：右～左板ナデ 外：ハケメ	やや密	粗砂少	良 内・外：N7/灰白色	ロクロ右回転
129	C4	S0002 1層	須恵器	横瓶 底	口径：— 器高：(3.05) 底径：—	内：同心円文直異一カキメ 外：平行タタキ一カキメ	やや密 石英	粗砂少	やや 良 内・外：N7/灰白色	

第8表 遺物観察表(5)

凡例 口：口縁部、口端：口縁端部、体：体部、脚：脚部
天：天井部、杯：杯部、脚：脚部、底：底部

組合番号	グリッド番号	遺物名	種類	器種 残存部位	法度 (cm) (+)推定値	成形・調整・装飾	胎土	焼成	色調	備考	
130	B5・C4	SD002 2-3層	土師器	板底	口径：— 器高：(1.45) 底径：(6.2)	内・外：ロクロナデ、糸切り	粗良	良	内・外：10YR8/3浅黄褐色	摩耗	
131	C4	SD002 1層	土師器	板底	口径：— 器高：(2.8) 底径：(6.0)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、糸切り	密 富士・石英	粗砂少	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色	摩耗	
132	E5	SD002 2層	土師器	板底	口径：— 器高：(2.8) 底径：(7.0)	内・外：ロクロナデ、糸切りか	粗良	良	内・外：2.5Y8/1灰白色	摩耗	
133	D6	SD002 2層	土師器	裏 口	口径：— 器高：(2.05) 底径：—	内・外：横ナデ	密 富士	粗砂や多 良	内・外：10YR8/3浅黄褐色		
134	D5	SD002 2層	土師器	裏 口	口径：— 器高：— 底径：—	内：同心円文当具 外：平行タキ	やや密 石英	粗砂やや多 良	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色		
135	D5	SD002 2層	土師器	裏 口～底	口径：(13.2) 器高：(2.4) 底径：—	内：横ナデか 外：横版ナデか、横ナデ	粗 石英	粗砂多	良	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色	
136	D5	SD002 1層	土師器	裏 口～底	口径：(17.6) 器高：(2.4) 底径：—	内・外：横ナデか	やや密 富士	粗砂やや多 良	内・外：10YR8/3浅黄褐色	摩耗	
137	D6	SD002 1層	土師器	裏 口	口径：(31.1) 器高：(2.8) 底径：—	内・外：横ナデ、指圧痕	密 石英	粗砂や多 良	内・外：10YR7/3にぶい黄褐色		
138	B5	SD002 1層	土師器	裏 底	口径：— 器高：(4.4) 底径：(9.6)	内・外：—	粗 石英・蜜母	粗砂多	ややN5/灰色 良	内：N5/灰色 外：10YR8/3浅黄褐色	
139	C4	SD002 2層	灰陶陶器	横又皿 底	口径：— 器高：(0.7) 底径：(7.1)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ロクロケズリ	密 —	粗	内・外-N8/灰白色	灰陶	
149	D4	基本形序 I-II	須恵器	杯盤 天	つまみ径：2.3 つまみ高：0.75 器高：3.2 底径：7.6	内：ロクロナデ 外：ヘラ切りナデ	やや密 石英	中砂やや多 粗砂少	良	内・外-N7/灰白色	ロクロ右回転 焼成跡ひび割れ
150	D4	基本形序 I-II	須恵器	杯身 底	口径：— 器高：(1.5) 底径：(5.2)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	密 石英	粗砂少	良	内：N7/灰白色 外：N6/灰色	ロクロ右回転
151	D4	基本形序 I-II	須恵器	杯A 口～底	口径：(12.6) 器高：3.5 底径：(9.0)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ、ヘラ切り	やや密 石英	中砂や多 粗砂少	良	内・外-N7/灰白色	ロクロ右回転
152	C4	基本形序 I-II	須恵器	裏 底	口径：— 器高：(1.7) 底径：(13.6)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ロクロケズリ	やや密 富士	中砂や多 粗砂少	良	内・外-N7/灰白色	ロクロ右回転
153	D3	旧水路	須恵器	杯形蓋 天	口径：— 器高：(4.0) 底径：—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 2重圓錐形	密 —	粗砂少	良	内・外-N7/灰白色	ロクロ右回転
154	D4	基本形序 I-II	須恵器	杯身 口～底	口径：(15.6) 器高：(4.0) 底径：—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ ロクロケズリ、体切縫3	密 —	粗砂少	良	内：N7/灰白色 外：N6/灰色	ロクロ右回転
155	C4	基本形序 I-II	須恵器	杯身 体～底	口径：— 器高：(3.0) 底径：(9.5)	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 体波紋全、ヘラ切り	密 石英	粗砂少	良	内・外-N6/灰色	ロクロ右回転
156	F3	基本形序 I-II	須恵器	横瓶 底～瓶	口径：— 器高：(6.4) 底径：—	内：ロクロナデ 外：ロクロナデ 横行タキナカキメ ロクロナデ	密 石英	粗砂少	良	内・外-N7/灰白色	
157	C4	基本形序 I-II	珠洲	横瓶 体～底	口径：— 器高：(6.3) 底径：(12.2)	内：ロクロナデ 横行単粒14条 ロクロナデ、鈎止め切り	やや密 石英	粗砂や多 良	内・外-2.5Y7/1灰白色		
158	D5	基本形序 I-II	珠洲	裏 口縫線	口径：(35.2) 器高：(6.6) 底径：—	内：横ナデ、指圧痕 外：横ナデ、平行タキ	やや密 石英・墨青	黑色粒多 良	内・外-N7/灰白色		
159	D4	基本形序 I-II	珠洲	裏 口～底	口径：— 器高：(5.9) 底径：—	内：ロクロナデ、指圧痕 外：ロクロナデ、タキ目	やや密 石英・墨青	粗砂少 良	内・外-N6/灰色		
160	D4	基本形序 I-II	珠洲	裏 底	口径：— 器高：(10.2) 底径：—	内：平行タキ 外：指圧痕、無文當具 横ナデ	やや密 石英	粗砂多量 やや良	内：N6/灰色 外：N7/灰白色		

第9表 遺物観察表(6)

順番 番号	遺構名 層位	種類	部位 残存部位	法量(cm)			(↓) 検定値	歯土	焼成	色調	備考
				長	幅	厚					
16 84	SD003-1 2層	土製品	円板状 完形	3.0	3.15	0.55	やや粗 石英	粗砂多	やや黄	SY6/1灰色	側面カット
木製品											
順番 番号	遺構名 層位	種類	法量(cm)			(↓) 検定値		調査		備考	
			長	幅	厚	内面		外面			
20 85	SD003-2 加工材	(13.9)	(1.75)	(0.6)	—	—	—	—	—	—	
21 86	SD003-2 2層	炭化材	(17.35)	(3.0)	(3.1)	加工	加工	加工	加工	机か	
66 84	SE031 6層	皿 口～底	(16.3)	(1.45)	(14.7)	ロクロケズリ	ロクロケズリ	ロクロケズリ	ロクロケズリ	孔隙0.15	
67 84	SE031 6層	曲物	4.95	25.75	0.2～0.25	キザミ3～5mm間隔	—	—	—	つなぎ・接縫皮	
68 84	SE031 6～7層	車輪	15.1	1.9	0.4	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	—	
69 84	SE031 6層	車輪	(15.0)	(1.35)	0.4	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	—	
70 84	SE031 7層	加工材	8.3	3.5	1.4	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	—	
71 84	SE031 7層	柱	(15.15)	1.8	1.95	先端ケズリ	先端ケズリ	先端ケズリ	先端ケズリ	—	
72 84	SE031 6層	加工材	(8.05)	5.7	3.35	一部加工	一部加工	一部加工	一部加工	炭化	
114 84	SD001 一層	加工材	(9.0)	2.2	1.5	ケズリ	ケズリ	ケズリ	ケズリ	—	
145 84	SD002 2層	板材	(16.8)	1.6	0.6	—	—	—	—	—	
147 85	SD037 1層	炭化材	(17.65)	2.65	2.0	—	—	—	—	炭化、割り材	
148 85	SD037 1層	炭化材	(20.1)	4.25	0.9	不明	不明	不明	不明	—	
樹脂関連遺物											
順番 番号	遺構名 層位	種類	部位 残存部位	法量(cm)			(↓) 検定値	歯土	焼成	色調	備考
				長	幅	厚					
17 86	SD003 1層	鉄	鐵薄	3.4	2.4	1.95	—	—	—	—	—
18 83	SD003 一層	石	伊壁	6.6	4.1	3.4	—	—	—	—	レキ岩・被熱
19 85	SD003 2層	鉄	鐵薄	4.35	3.7	1.9	—	—	—	—	免治経い
34 83	SP067 一層	鉄	鐵薄	2.2	2.15	1.5	—	—	—	—	小レキ混入
43 84	SP052	鉄	鐵薄	2.7	2.9	2.45	—	—	—	—	—
109 84	SD001 1層	土	フィゴ羽口 接着部	(4.0)	(6.3)	厚:(1.5) 復元孔径:(3.6) 全径:(6.5)	—	粗 石英・長石	粗砂多	良	内・外:N7/ 灰白色
110 84	SD001 2層	石	伊壁	(8.2)	(5.65)	(3.55)	—	—	—	—	鉄厚(0～1.1) 厚度(2.7)
111 84	SD001 1層	鉄	鐵薄	2.7	2.1	1.8	—	—	—	—	免治経い
112 84	SD001 1層	鉄	鉄 被熱型	(4.55)	(4.2)	(1.95)	—	—	—	—	—
113 84	SD001 3層	鉄	鉄 被熱型	(4.05)	(3.8)	(2.25)	—	—	—	—	免治経い
140 84	SD002 2層	土	フィゴ羽口	(6.1)	(6.6)	厚:(1.6) 全径:(5.7) 孔径:(2.7)	—	やや粗 石英	粗砂多	良	内:IOYR8/2 灰色 外:N7/ 灰白色
141 84	SD002 2層	土	フィゴ羽口 接着部	(8.3)	幅:(1.8)	厚:(1.8)	全径:(8.0) 孔径:(4.6)	粗 石英	粗砂多	やや良	内・外:被熱 IOYR8/2 灰色 IOYR8/1 灰白色
142 84	SD002 1層	鉄	鐵薄	5.0	4.5	2.4	—	—	—	—	—
143 85	SD002 2層	石	伊壁	12.2	5.8	4.4	—	—	—	—	レキ岩・被熱
144 85	SD002 1層	鉄	鉄 被熱型	5.4	5.4	2.2	—	—	—	—	—
石製品											
順番 番号	遺構名 層位	種類	部位	法量(cm)			(↓) 検定値	石材	調査		
				長	幅	厚			粗砂多	良	鉄分付碧玉、孔 道元、土質質
92 F3	SP009 3層	砾石		32.55	21.35	9.4	砂岩	3面 砾石を礫石に転用	—	—	—
146 85	SD002 1層	砾石		5.45	1.65	3.8	砂岩	3面	—	—	—
金属製品											
順番 番号	遺構名 層位	種類	部位	法量(cm)			(↓) 検定値	石材	調査		
				長	幅	厚			粗砂多	良	—
161 85	表揮	鋼	鉄質	2.4		0.6	—	—	—	—	—

第4章 総括

第1節 遺跡の様相

第20図は過去の調査をまとめたものである。過去の調査では赤田SD01[#]を主体とした遺跡であることが分かる。赤田SD01は南西から北東へ小さく蛇行しており、多くの遺物、特に祭祀色の強い遺物が出土している。その中でも3区出土の草板名を墨書した土師器は注目された。その他の地区においても木製品と墨書き器の多さに赤田SD01は特徴付けられる。また、周囲には1区・2区において掘立柱建物、10区において井戸、3区・4区・19区では堰状遺構が検出されているが、堅穴建物等は検出されておらず、集落的要素はほとんどみられない。以上から、本遺跡についてこれまでの調査では赤田SD01を主体とした祭祀に関連する遺跡として認識してきた。

今回の調査においても試掘調査時点において4条の溝が確認されており、赤田SD01との関連性が注目された。しかし、今回の調査では、SD001・002・003・037の4条の溝を検出したが、赤田SD01とは様相が異なっており、直接関連する溝ではないことが分かった。

SD001・002はほぼ並行して走っており、埋土の様相も概ね同様と言える。埋土の堆積状況から、自然流路ではなく、人為的に掘削され、埋め戻されたような痕跡も確認できる。また、埋土中からはフイゴ羽口・鉄滓等鍛冶関連遺物が比較的まとまって出土している。SD001・002は2条1セットで2重の溝と考えられる。

SD003は他の溝と異なり、弥生時代終末期と古墳時代前期の2時期を確認できた。両者とも黒色層の中に多量の炭化物粒と高杯・壺・甕が出土し、まとまった状況で出土していた。出土遺物の中には土器の表面が剥離したり、貫入状のひび割れのものがみられ、被熱を受けたものと推測される。ほぼ一固体に復元できた甕は口縁部から頸部が約半周程度欠損しており、祭祀的なものが行われていたことを示唆している。弥生から古墳時代の溝は1区においても確認されており、SD003とつながるものと考えられる。SD037は奈良から平安時代の遺構と推定され、1区の溝とは別になる。

今回の調査において、過去の調査と異なる点は柱穴群と小溝が多数検出されたことにある。そのまとまりが大きく3箇所に分かれている。特に本調査区中央の周囲を溝と柵列で区切られた多角形の掘立柱建物である。周辺には多量の炭化物と、被熱を受けた須恵器が出土したSP065、斎串・赤彩土器・墨書き器が出土したSE031が同じ遺構集中箇所内にみられる。また、過去の調査では9世紀後葉以降が中心であったのに対して、今回の調査では8世紀後葉から9世紀中葉が中心で、今回の調査のほうが1段階古く位置づけられる。

以上から、本遺跡は祭祀の場としての性格も窺われ、今回の調査成果により遺構・遺物集中箇所が北へ変遷していることが明らかとなった。変遷過程はSB048を中心とした遺構集中箇所から赤田SD01である。赤田SD01の時期には本調査の西側遺構集中箇所とSD001・002の集落が形成されたと推察される。

第2節 遺物の様相

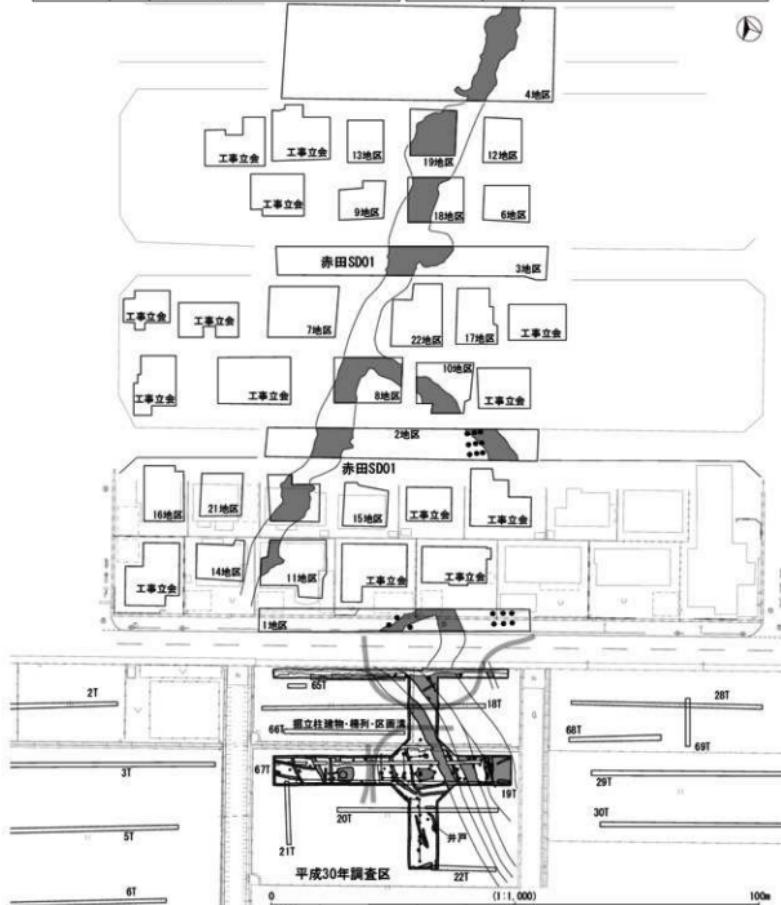
今回の調査では、弥生・古墳時代と奈良・平安時代の遺物を主体として出土している。

弥生・古墳時代

SD003は上層から古墳時代前期、下層から弥生時代終末期の遺物が出土している。赤田I遺跡では

赤田 I 遺跡主要調査区一覧

調査年度	地区	特記事項	調査年度	地区	特記事項
平成14	1	獨立柱建物	平成18	14	漆串
	2	赤田SD01、獨立柱建物、漆書土器「東・二・萬古カ・仁」 縄輪陶器・壺串・人形・刀形・植物・複層（遺物多）		15	縦輪陶器
	3	赤田SD01（複状追構）、草名柱土器・壺串土器「東 和歌・三・仁」・縦輪陶器・壺串・人形・馬形・鳥形・舟形 刀形・植物・複層・刀形（遺物多）		16	赤田SD01、壺串
	4	赤田SD01（複状追構）、壺書土器「福・×」・壺串・舟形 植物		19	赤田SD01（複状追構）、壺串・舟形
平成16	8	赤田SD01・壺書土器「仁」・壺串・人形・馬形（遺物多）	平成19	20	赤田SD01、人形
平成17	10	井戸		20	赤田SD01、人形
	11	赤田SD01（遺物少量）	平成30		大溝（SD001-002-003） 獨立柱建物・縦列・区画溝（SD043・SA056・SP065・SP052 ・SD024・SD025・SD068・SD113・SD124） 井戸、漆書土器「K」・非漆土器・壺串

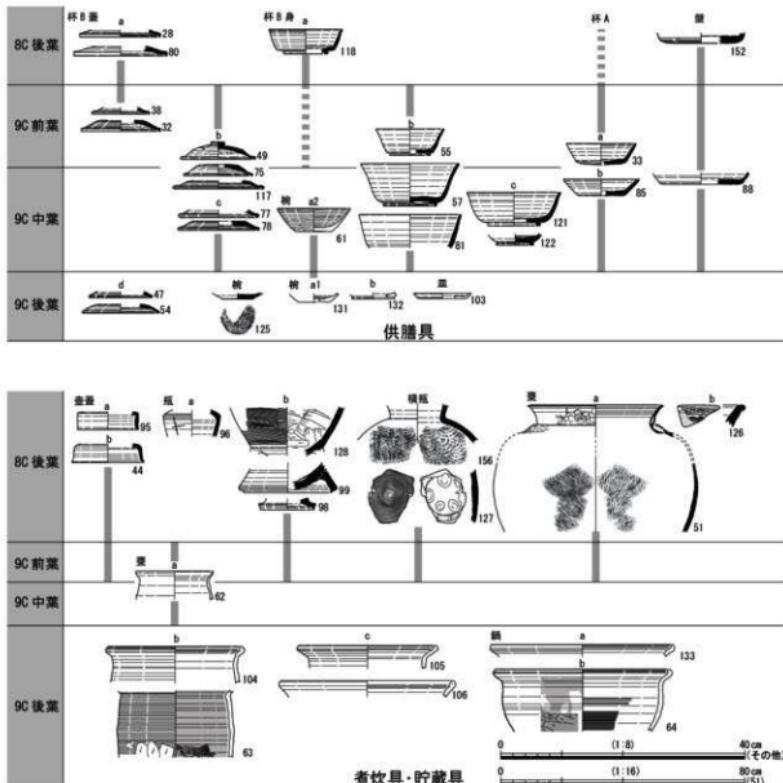


第20図 集落の様相

平成14年度調査の1地区においても弥生時代終末期から古墳時代中期までの遺物が確認されている。
奈良・平安時代

今回の調査で出土した土器を第21図にまとめた。第21図では上段に供膳具、下段に貯蔵具・煮炊具の変遷を示している。時期幅は8世紀後葉から9世紀後葉で、9世紀前葉から後葉を中心とする。種類は須恵器と土師器が大半で、第3章第2節において既述したが、須恵器と土師器の割合は須恵器より土師器の方が上回っている。この傾向はSD001・002からの出土量が最も多いことが大きく影響しているため、SD001・002の中心となる時期を示している。ただし、9世紀中葉以降では須恵器の割合が減少傾向にある。

第21図の供膳具と煮炊具・貯蔵具では様相が異なっている。貯蔵具では須恵器の数量が9世紀中葉まで土師器より多く、9世紀後葉になると須恵器と土師器の数量が概ね同量となる。煮炊具・貯蔵具では9世紀前葉まで須恵器のみで、9世紀中葉以降になると土師器のみとなる。このことは供膳具における須恵器の減少、煮炊具における土師器の増加によるもので、生活用品の変化がここに表れて



第21図 土器の変遷

いるものと推察される。

以上から、遺構と遺物について第10表にまとめた。第10表では過去の調査と今回の調査の主要遺構の変遷を比較した結果、既述したとおり、今回の調査成果では過去の調査と様相が異なっていることが分かる。

弥生から古墳時代では概ね同様であるが、今回の調査では古墳中期を確認できなかった。

奈良から平安時代では過去の調査において不明瞭であった9世紀中葉以前の遺構と遺物を確認し、本遺跡の性格について、その一端を明確にすることができた。また、赤田SD01の祭祀遺構以前と考えられるSB048を中心とする遺構群については今後も検討を要するが、本遺跡の変遷について一石を投じることとなる。

今後は弥生から古墳時代と奈良から平安時代の2時期の遺構と遺物の良好な資料が確認され、資料の増加により詳細な遺構と遺物の検討が可能となる。今後の発掘調査と研究に期待したい。

第10表 遺構と遺物の変遷表

年代・時期	過去の調査	平成30年度調査		
		(SK090)		
秦 中期	■■■	SK003 上層		
後期	■■■	SK003 下層 SK090 SK092		
終末期				
古墳 初期				
中期	■■■			
空白期間				
8C 後期	■■■	■■■	■■■	■■■
9C 初期	■■■	■■■	■■■	■■■
9C 中葉	■■■	■■■	■■■	■■■
9C 後期	■■■	■■■	■■■	■■■
10C 初期	■■■	■■■	■■■	■■■
10C 中葉	■■■	■■■	■■■	■■■
10C 後期	■■■	■■■	■■■	■■■

引用参考文献・註

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 『漆町遺跡I』
- 射水市教育委員会 2006 『射水市内遺跡発掘調査概要(2)』
- 射水市教育委員会 2008 『射水市内遺跡発掘調査報告I』
- 片山博道 2015 「越中における須恵器生産の研究」『大境』第34号 富山考古学会
- 神島利夫 1992 「I. 地形」『10万分の1富山県地質図説明書』内外地図株式会社
- 小杉町教育委員会 2003 『赤田I遺跡発掘調査報告』
- 小杉町教育委員会 2005 『赤田I遺跡発掘調査概要(1)』
- 斎藤孝正・後藤健一 1995 『須恵器集成図録』第3巻 東日本編 I 雄山閣出版株式会社
- 珠洲市立珠洲焼資料館 1989 『珠洲の名陶』
- 相馬桓雄 1992 「II. 地質」『10万分の1富山県地質図説明書』内外地図株式会社
- 滝沢規郎 2004 「新潟県における弥生時代後期～古墳時代の土器について」『第185回新潟県考古学談話会発表要旨』新潟県考古学談話会
- 町田洋・松田時彦・海津正倫・小泉武栄 2006 『日本の地質5 中部』財團法人東京大学出版社
- 谷内尾晋司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」『北陸の考古学』石川考古学研究会々誌 石川考古学研究会
- 山下昇・紺野義夫・糸魚川淳二 『日本の地質5 中部地方II』共立出版株式会社

註 今回の調査区におけるSD001と区別するために、過去の調査区で検出された溝を一括して「赤田 SD01」とした。

弥生・古墳時代の遺構 写真図版 1

1. SD003-1 完掘
(南西から)



3. SD003C 断面
(北西から)



5. SD003-1
遺物出土状況
(西から)



6. SD003-2
遺物出土状況
(西から)

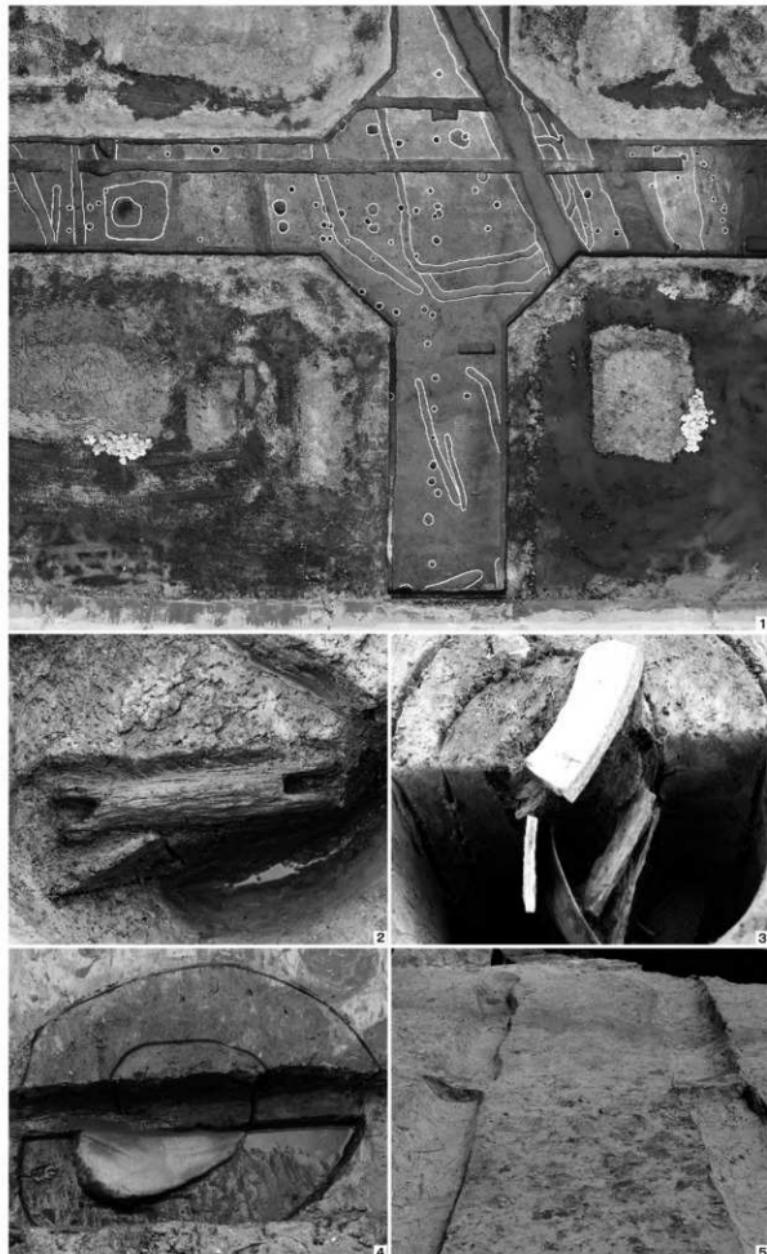


7. SK090 断面
(南から)



8. SD092 断面
(南から)

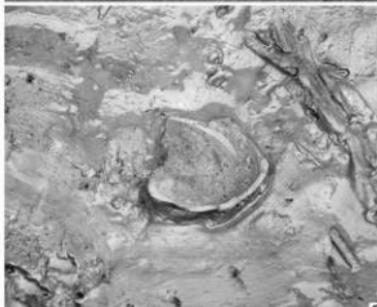
写真図版2 奈良・平安時代の遺構(1)



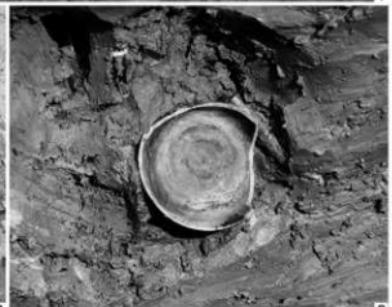
1. SE031 完掘
(西から)



2. SE031
遺物出土状況
(西から)



3. SE031
遺物出土状況
(西から)



4. SI100 断面
(東から)



5. SI100 内
SK032 断面
(南から)



写真図版4 奈良・平安時代の遺構(3)



1. SD001-002
完掘
(南東から)

2. SD001 断面B-C
(南から)

3. SD002 断面D
(南から)

4. SD002-003
断面A
(南から)

5. SD037 断面
(北から)

出土遺物 (1) 写真図版 5

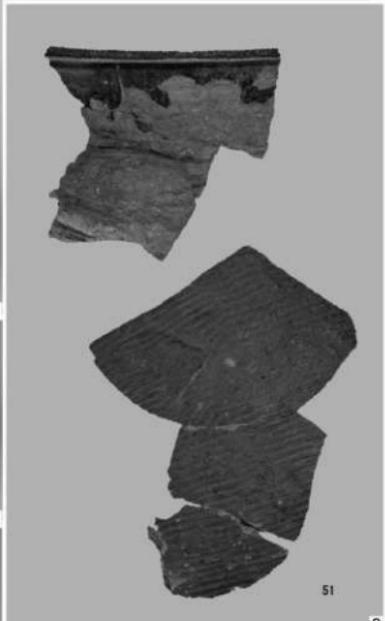
1. 弥生土器



2. 古墳土師器

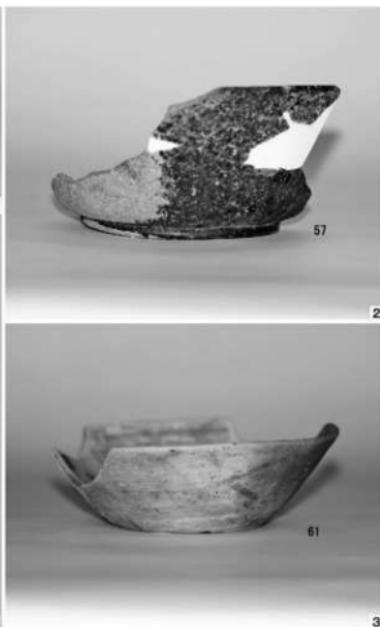


3~8. 古代須恵器

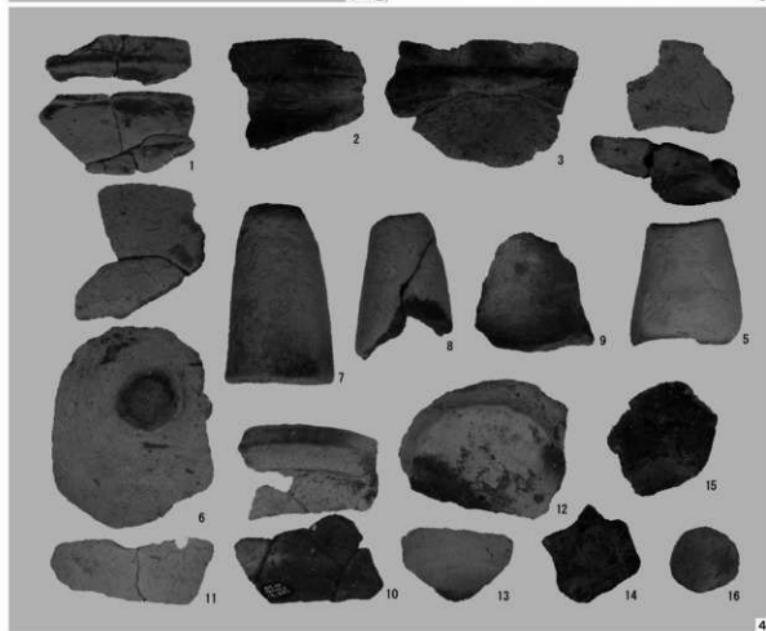


写真図版6 出土遺物(2)

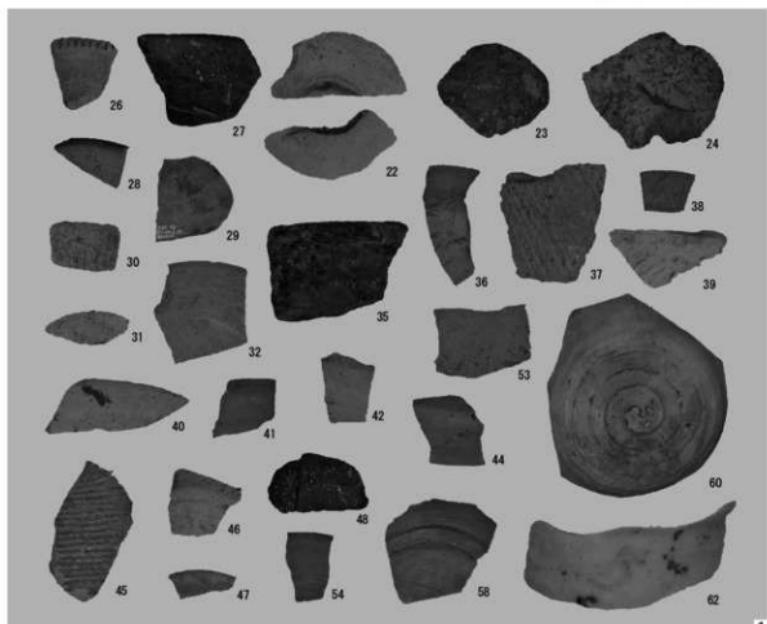
1~3. 須恵器



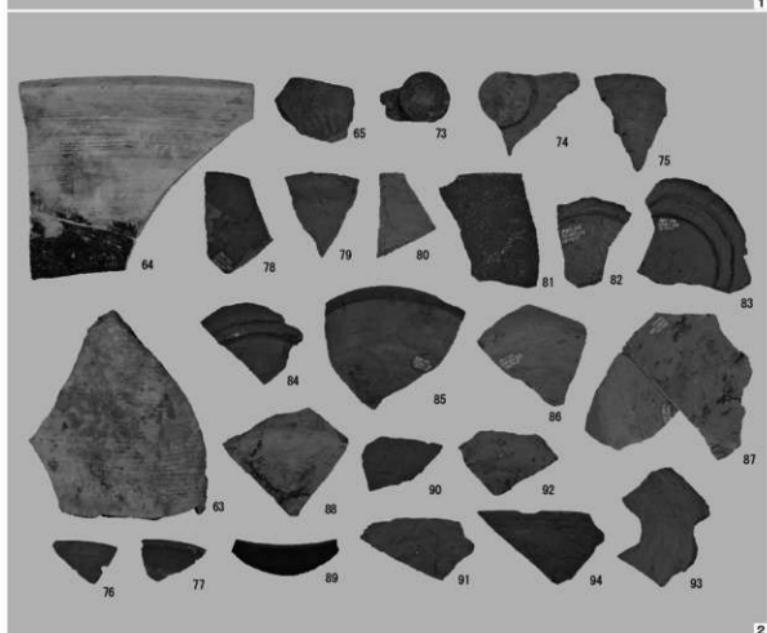
4. 弥生土器
古墳土器



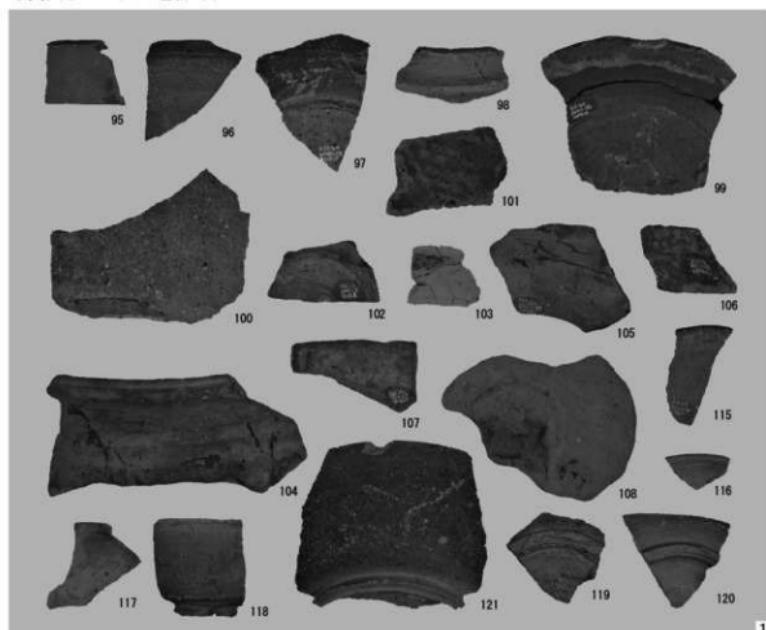
1. 弥生土器
古墳土師器
古代須恵器
古代土師器



2. 古代須恵器
古代土師器

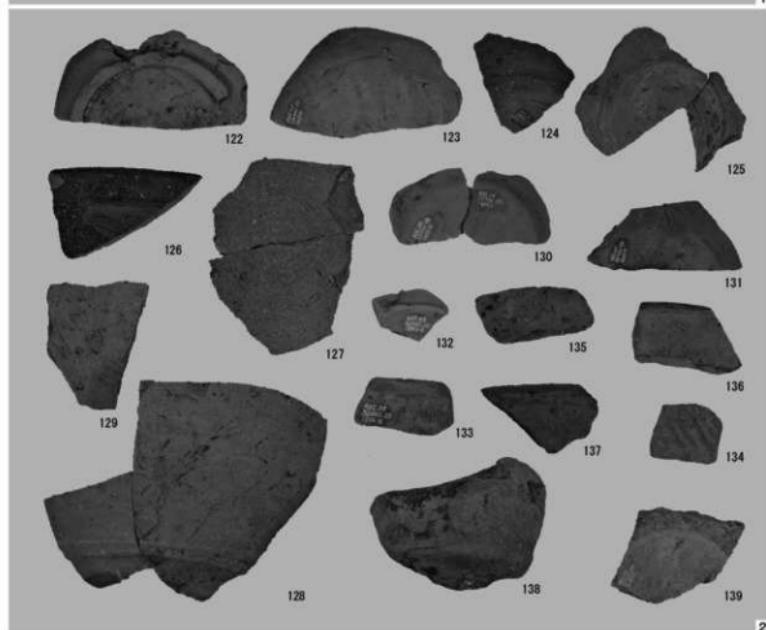


写真図版8 出土遺物(4)



1. 古代須恵器
古代土師器

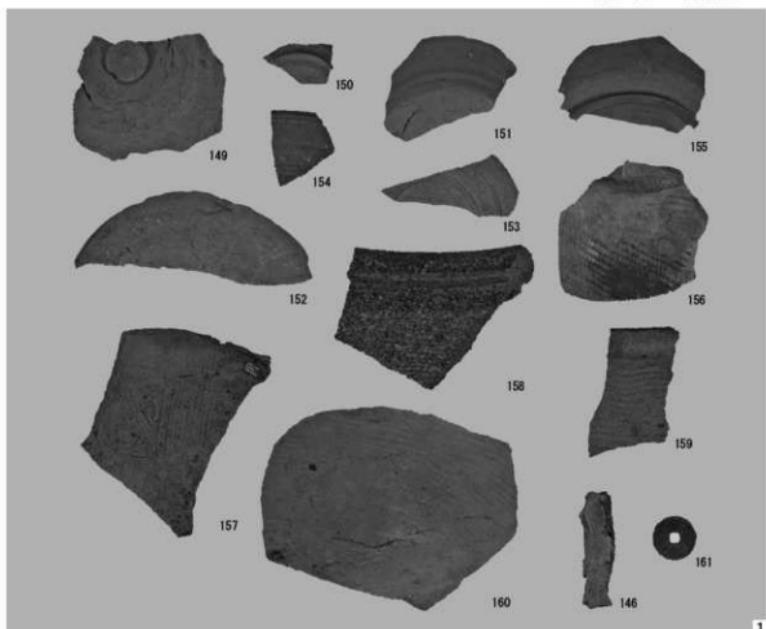
1



2. 古墳土師器
古代須恵器
古代土師器
灰釉陶器

2

1. 古代須恵器
珠洲
石製品
銭貨



1

2. SP009 碓石

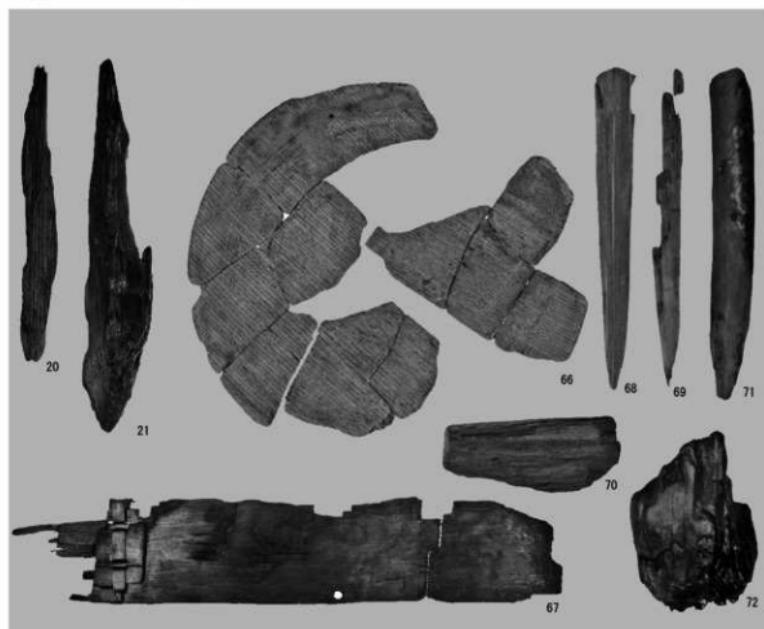


52

2

写真図版 10 出土遺物 (6)

1. 木製品



2. 銀冶関連遺物
ワイゴ羽口
鉄滓
炉壁



報告書抄録

ふりがな 書名	あかんだいいちいせきはつくつちょうさほうこくに 赤田I遺跡発掘調査報告(2)						
副書名	射水市赤田第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	金三津英則(射水市教育委員会)、片山博道(日本海航測株式会社)						
編集・発行機関	射水市教育委員会						
所在地	〒939-0294 富山県射水市新開発410番地1 TEL 0766-51-6637 FAX 0766-51-6663						
編集機関	日本海航測株式会社						
所在地	〒921-8042 石川県金沢市泉本町2丁目125番地 TEL 076-243-0811 FAX 076-243-0822						
発行年月日	西暦 2019年3月15日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
あかんだいいちいせき 赤田I遺跡	よかまほんいみずしげしげじょう 富山県射水市橋下条	211	36° 36' 28' 27"	137° 03' 04"	20180331 ~ 20180529	611	土地区画整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
赤田I遺跡	集落跡	弥生~古墳 奈良~平安	掘立柱建物 溝・井戸・土坑 柱穴・壙列	弥生土器・土師器・須恵器・墨書き土器 赤彩土器・石製品・木製品・鐵治閏連			
	散布地	縁台～江戸		珠洲焼・越中瀬戸焼 肥前系・瀬戸美濃系陶磁器			
要約	今回の調査では、弥生から古墳時代(大溝・土坑)と奈良から平安時代(大溝・井戸・土坑・掘立柱建物・壙列)の遺構が確認された。遺物は各遺構から弥生から古墳時代、奈良から平安時代の2時期のものが出土した。 特筆すべき点は、SD003では上層の古墳時代前期と下層の弥生終末期の2時期において炭化物層が確認され、炭化物層から出土する土器は2次的な被熱を受けていたことなどがある。SD001とSD002は平行して走っており、掘り直しの痕跡が確認された。掘立柱建物と井戸も検出され、井戸からは赤彩土器・墨書き土器・斎串・皿・曲物等多くの遺物が出土した。						

北緯度・経度は世界測地系に基づく値。

赤田 I 遺跡発掘調査報告(2)

-射水市赤田第二土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査-

2019年3月15日 発行

編集・発行 射水市教育委員会
〒939-0294 富山県射水市新開発410番地1
TEL 0766-51-6637 FAX 0766-51-6663

編集 日本海航測株式会社
〒921-8042 石川県金沢市東本町2丁目125番地
TEL 076-243-0811 FAX 076-243-0822

印刷・製本 中央印刷株式会社
〒930-0817 富山県富山市下奥井1-4-5
TEL 076-432-6572 FAX 076-432-2329
